

---

# バカとテストと転生者

斎藤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと転生者

### 【Nコード】

N8250J

### 【作者名】

斎藤

### 【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の世界を舞台にした転生物です。

## プロローグ

今日は曇りの予報だったのに空は良く晴れ渡っている、そんな空を見ていると周りが妙に騒がしい事に気付いた。

何が起こっているのだろう、野次馬根性からその騒ぎを見に行こうとするが身体を動かす事が出来ない、

（何で・・・動かないんだろう？）

ろくに働かない頭でぼんやりと考える、周りの騒ぎが大きくなってきた。

「ひき逃げか・・・？」

「子供を助けて自分が轢かれたらしいよ」

「まだあの人も若いのに・・・」

会話の一部が聞こえ自分の置かれている状況を思い出す、

（そうか・・・僕はもう）

状況を思い出し理解した瞬間急に眠気が襲った、堪え難い眠気に負け瞳をとじる、

（良い天気だな）

最期に見た空は綺麗な青空だった。

金輪際開く事はないんだろうなと思っていた目が開いた、まず目に入ったのは今にも雨が降り出しそうな黒い雲、そんな雲を見ながら身体を起こす、周りを見渡すとどうやら草原のような場所にいらしく一面に緑の絨毯が広がっていた、

訳が解らずに呆然となる、この時に鏡で自分の顔を見たら僕の表情はこれ以上に無いほど間抜けに映っていただろう。

しばらく座り込んでいたがこのままでは何も始まらないと思い立ち上がる、雨が降る前の湿った風が吹き周りの草がそよいだ。

「すぐに振りそうだな」

呟き何か無いかと服を探る、だが傘はおろか小銭の一つも入っていない、思わず頭を抱えなくなる。

さて、困った事になったと思いつつも一度辺りを見渡す、すると右側に灰色の建物が見えた、

「よかった・・・」

安堵のため息と一緒に声も出る、今にも降り出しそうな雨雲を再び見上げ建物に向かって走りだした。

建物についてみると何かの博物館か美術館らしく予想外に大きかった。

僕が入口（多分）の前に立つと自動ドアだったらしく勝手に開く、一歩中に入り呼び掛けてみた。

「すみません、誰か居ませんか？」

返事は無く自分の声が建物内にこだまするのみ、少し不気味に感じつつ奥に入っていく、奥は様々な絵画や写真が節操も無く並んでいる。

日本画の隣に洋画があったり、写真が上下逆さまになっていたりとまるで有る物を適当に並べただけに見えた。

しかし一つ一つの作品は素人目にはとても良いものばかりに思える、

「こんにちは」

いつのまにか作品をみる事に夢中になっていた僕の背後から突然声がかけられた。

「ひゃあー！」

情けない悲鳴を上げ振り返る、そこには帽子を目深に被りラフな服装をした少女が立っていた。

少女は僕と視線が合うと軽く微笑み口を開く、

「並びは目茶苦茶だけど結構良い作品揃ってるでしょ」

考えを見透かされて僕は苦笑を浮かべる、少女は周りの作品を見渡し逆さまになっている作品を直した、その一連の動作を見ながら僕は彼女に質問する、

「此処が何処か解る？」

僕の問い掛けに彼女は頷き応えた、

「此処は・・・強いて言うならあの世かな、ちょっと違うけど」

やはり僕は死んだらしい予想はしていたしあの行動も反省こそしているけど後悔は微塵もない。

・・・未練は売るほど有るけど。

彼女はちらりとそんな僕を見て話し掛けてくる、

「何で此処に来る事になったのかは解らないけど、後悔はしてないみたいね」

彼女の言葉に頷きまた展示物に目をやる、彼女も黙り込み静寂が僕達を包み込んだ。

肩を叩かれ振り向く、いつのまにか少女が僕の後ろに来ている。

「何？」

話し掛ける、少女は指を三本立てて話だす。

「君には三つの選択肢があるの、一つはこのまま天国に行く、この場合君は生きている人を見守りながら暮らす事になるわ、二つ目は転生をする、この場合は君が生きた世界とは別の世界にしか行く事は出来ないけど」

少女は一旦言葉を切り笑顔で最後の指を折る、

「三つ目は・・・あえて地獄にチャレンジ」

「あえて!!!？」

最後の選択肢に思わず大声で突っ込んでしまった、少女は僕の突っ込みにのんびりとした口調で応えた、

「実質二択だね」

うん最後の選択肢は端から考えるに値しない、いくら何でも地獄には行きたく無いな。

天国か別の世界の二択・・・まだ生きている親や友達の事を思う、こんな僕でも泣いてくれる人は居るその人達を裏切りたくはない、

「僕は・・・」

言い淀み視線をそらす、どちらも選べない僕に少女は声を掛けた、

「どうしたの？」

僕はいま思っている事を話した、僕の思いを聞いた少女は微笑みながら言う、

「君が一番君らしくいられる方を選べば良いの、君の為に泣いてくれる人達だもの君の事を責めたり何かしないよ、だから大丈夫」

少女にそう諭され迷いが消えた、少女につられて笑いながら僕も答える、

「僕は・・・僕は違う世界を見てみたい」

僕の答えに少女は頷き、念を押すように聞いてくる

「本当に良いの？」

僕は少し間を置いてゆっくり頷く、少女は服のポケットから一枚のカードを取り出し僕に向かって差し出す、

「これは？」

そのカードについて聞いてみると少女はニコニコしながら

「お守りみたいな物よ」

と言った、僕がカードを受け取ると此処へ来るときと同じように突然眠気が襲う、堪える間もなく視界が暗くなり・・・僕は眠りについていた。

「君が選んだんだから新しい世界で頑張ってね」

少女のそんな言葉を最後に僕は意識を手放した。

再び目が開く、今度は白い天井が目飛び込んできた、身を起こそうとするが自由に動けない、何故だろうと思ひ身体を見ると・・・赤ん坊になっていた、そして思う、

（もつどうにでもなれ・・・）

二回目の人生は諦めムードから始まった。

## 第1話 文月学園へ（前書き）

第1話更新！でも駄文です精進が必要だな

## 第1話 文月学園へ

この世界で二回目の人生が始まり16年の月日が流れた、今僕は、

「これより卒業証書授与式を始めます」

中学の卒業式の真っ最中だ。

それにしても暇で仕方ない、校長先生の有り難いお話が一本調子で眠りを誘ってくる、寝てたまるかと目に力を入れる。

「耐え切れた・・・」

校長先生のお話から来賓、祝電と長い長い退屈な時間がようやく過ぎ、いよいよ本日のメインイベント卒業証書授与が始まった、先生がいつもは決して出さない良く響く声で生徒の名前を呼び順調に式は進み僕の隣まで来る、

「坂本 雄二！」

「はい！」

返事をし隣の生徒・・・坂本 雄二が立ち上がり歩き出す、背が高く逆立っている短髪がたてがみのように見える野性的な男だ、

けだるそうに歩く雄二を見送っていると僕の名前も呼ばれた。

「沢渡 真琴！」

「はい！」

返事をし校長先生の下へと歩き出す。

それから20分後式はこれといった破綻もなく順調に終わりを迎えた。

先生からの連絡や最後の挨拶も終わり、僕は玄関まで来ていた、下駄箱から靴を取り出そうと手を伸ばす、ふと後ろに人の気配を感じ振り向くと雄二が立っていた、

「雄二も今から帰り？」

僕の問いに雄二は『ああ』と返事をしつつ自分の下駄箱から靴を取り出す。

二人で並んで校舎からであると女の人の声が聞こえてきた、

「あら、雄二もう卒業式は終わったのかしら」

声のした方を向くと見た目20代ぐらいの女性がいる、雄二は目を見開き、

「お袋！今更何しにきやがった、卒業式はとっくに終わってんぞ！」

激しく突っ込んだ、何を隠そうあの女性坂本 雪乃さんは雄二の母親で実は40代なのに大学生ぐらいにしか見えない恐ろしい人だ。

「そもそも俺が朝起きた時にはもう家に居なかっただろ！今まで何処に居たんだ！」

突っ込んだ雄二は息が上がっている、雪乃さんは小首をかしげて訳を話す

「9時半を6時半に間違えてね、今まで暇つぶしにプチプチを潰してたらかんな時間になっちゃたのよ」

何とも凄い理由だ、雄二の家族とは長い付き合いだけどいつもこの人にはついて行けない、雄二は呆れた顔で更に突っ込む、

「生徒処か教職員すら学校に来て無い時間帯に卒業式する訳無いだろ！そもそも3時間も暇あったなら帰ってこいよ！」

雪乃さんは雄二の突っ込みを無視して僕の方に向く、

「真琴君こんにちは、卒業おめでとうね」

朗らかに話し掛けられ僕も笑いながらかえす。

「はい、ありがとうございます」

雄二は僕と和やかに話す雪乃さんに向けて声を張り上げる、

「頼むから俺の話を聞いてくれ！」

雄二渾身の叫びがまだ肌寒い3月の空にこだました。

あの後僕と雄二は昼食の為近くのうどんと丼のチェーン店に来ていた、いささか疲れてるように見える雄二が話し出す、

「それにしても、お袋には参ったな、時間を間違えるのにも程があるだろうに」

軽くため息をつく雄二を宥める、

「まあ落ち着きなよ、それに抜けてる所があるけど雪乃さん良いお母さんじゃないか」

僕の言葉に雄二は勢いよく首を横に振り否定する、

「あのなあ、たわしとウニを間違える母親が良いわけ無いだろ！」

激しい口調で言い切る雄二に苦笑を浮かべ話題を変えた、

「来月から文月学園が楽しみだね」

僕の振った新たな話題に雄二はニヤリと悪役な笑みを浮かべ言う、

「ああ、これで証明出来るからな」

雄二が文月学園を目指した訳は前に聞いた事がある、何でも『世の中勉強だけじゃ無い事』を証明したいとか、その為に科学とオカルトと偶然によって生まれた『試験召喚システム』を利用する腹積もりらしい。

もつとも何でそんな事をしたいのかまでは教えてくれなかったけど、でもまあ雄二とは小学校からの友達だ何と無くだけど理由は解る。

「僕も手伝うよ」

目の前に座っている雄二に言う、だけど雄二は呆れた顔をして

「お前は試召戦争したいだけだろ！」

と僕に突っ込むそれに頷き返す、

「まあね、だって面白そうじゃない試験召喚！<sup>サモン</sup>って」

少しばかり熱く語ってみる、雄二は呆れ顔を直し僕を見据え言う、

「真琴お前の力頼りにしていいんだな？」

僕は頷きおどけた調子で返す

「お任せあれ、策士殿」

1年後に始まる試験召喚戦争に向け決意を固める僕と雄二だった。

その日の夜、家の電話が鳴った、

「はい、沢渡です」

電話の向こうから落ち着いた男性の声が聞こえてきた、

「真琴か、ごめんな卒業式行けなくて」

僕の父さんだ、考古学の先生で今南米にいる、向こうの受話器が誰かに変わる気配がし今度は女性の声が聞こえてきた、

「入学式も行けないと思うの、真琴寂しいだろうけどごめんなさいね」

今度は母さんだ、生活力が丸つきりない父さんについて南米に行っている。

寂しい事は寂しいが、僕の事よりも両親が一番やりたい事に集中して貰いたい、

「大丈夫だよ、僕の事よりもお仕事頑張ってね」

僕がそう言うとか何か泣くむ音が聞こえて来た。

「真琴、お父さん頑張るからな〜！」

「お母さんも頑張るわよ〜！」

二人の気合いが入った言葉を聞いて僕は電話を切った。

3週間後僕は文月学園の入学式を終え自分の教室に来ていた。

黒板の前には良く日に焼けた筋肉質の先生が立っている、

「俺が今年1年間お前らの担任を勤める西村 宗一だ、よろしく頼む」

そんな先生の挨拶で僕の新しい生活が始まった、

1年後

「沢渡、ぎりぎりだぞ」

桜に包まれた坂道を駆け上がった僕に野太い声が掛けられる、声のした方を向くと西村 宗一先生通称鉄人が腕組みをして立っていた、

「すみません、でもほら遅刻してないんですし許してくださいよ」

僕の言葉を聞きながし西村先生は懷から封筒を取り出す、振り分け試験の結果が入っているはずだ。

封筒を受け取り開けようとする、意外と固く止められていて上手く空けれない、四苦八苦していると西村先生が何か言い出した。

「沢渡、俺はお前の多芸さは立派な事だと思う、だがな」

やっと開ける事が出来中身を確認する、出て来たプリントには、沢渡 真琴Fクラスとあった。

「もっと勉強しろ！」

最低クラスでの生活が幕を開けた。

## 第1話 文月学園へ（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

評価、感想よろしくお願いします。

## 第2話 自己紹介（前書き）

本当にご無沙汰しておりました、第2話です  
相変わらず駄文ですがよろしく願いします。

## 第2話 自己紹介

### 第一問

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路 瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジエラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんはひっかかりませんでしたね。

土屋 康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井 明久の答え

『合金の例・・・未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

沢渡 真琴の答え

『合金の例・・・鉄』

教師のコメント

引っ掛かってくれてありがとうございます。

Fクラスに行く途中Aクラスの教室が目に入った、

「うーん広いな」

広すぎる、まるでどこかの有名ホテルのロビーみたいだ、

「って、ぼんやり見てる時間なんかなかったな」

もう少しで遅刻だ、初日に遅刻何て真つ平御免なので急いでFクラスに向かった。

Aクラスがある新校舎から旧校舎へと入る、まず目についたのは申し訳程度についたプレートとボロボロの扉、プレートには2ーFと書いてある、ボロボロの扉を開けて中に入る、と突然声が掛けられた、

「遅いぞ、真琴」

その声が聞こえた方を向くと雄二が教壇の上に立っていた、

「なんだ雄二か、先生かと思ったよ」

溜め息混じりの僕の言葉を聞き雄二はニヤリと悪役の笑いを浮かべる、

「なに、俺がこのクラスの代表だからな、先生がまだ来ないから代わりに教壇に上がってみた訳だ」

「ふーん、じゃ試召戦争やりやすいね」

代表であれば皆を先導しやすい、クラス代表にとって自分のクラスは『国』みたいなものだ、

それに雄二ならやたら立つ弁舌でクラスの皆を奮い起こすだろうしね、

「僕の席は何処？」

さつさと鞆を降ろしたので雄二に自分の席を聞いてみる、雄二は何も言わずに視線を走らせた、僕も雄二の視線を追う、

成る程、雄二が何も言えないのも当然だ、畳にちゃぶ台、座布団という昭和の安アパートのような教室には決まった席等存在せず銘々好きな所に座っている、

「なんか教室っていうより寄り合い所みたいだね」

実に家庭的な雰囲気じゃないか・・・学校に家庭的な雰囲気は必要かどうかの議論はこの際ほっこり。

僕も真ん中辺りの座布団に腰掛ける、周りを見てみるが男子生徒ばかりでいささか暑苦しく感じた、

準備に手間取ってるのだろうかHR（ホームルームの事まさか知らない人はいないと思うが念のため）が始まる筈の時間になっても先生が来ない、時計を見ると10分程オーバーしていた

まあ、いつか来るだろうと思い時計から視線を外す、

やることも無いためぼんやりと教室内を見渡しと蜘蛛の巣やら溜まったホコリやらが目についた、

（掃除大変そうだな）

等とどうでもいい事を考えていると勢い良く教室のドアが開き愛嬌たつぷりの声が聞こえてきた。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

雄二がいきなり罵声を言う、それを聞き教壇の方を見ると雄二を見上げる形で学校1のバカの異名を持つ男子生徒『吉井 明久』がいた、

2人は何事が話し込んでいる、雄二がニヤリと口の端を吊り上げるのが見えた、大方『このクラス全員が兵隊だ』みたいな事を言っているのだろっ、

明久の後ろに男性が来る、その男性は明久と雄二に二言三言話し掛けた、どうやら『席に着け』って感じの事を言ったらしい、

教壇から降りた雄二と明久が空いている座布団に座る。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原 慎です。よろしく願います」

そう挨拶した福原先生は寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを着た、

喜びも哀しみも噛み締めたような哀愁漂うオジサンだった。

その福原先生は自分の名前を黒板に書こうとしたがやめた、チョークが用意されていないらしい、

確かにクラス最下位のFクラスの設備が最悪なのは理解できる、しかしチョークが無かったり教壇まであんな直ぐに壊れそうな代物だと先生が気の毒に思えた。

「皆さん全員にちゃぶ台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出て下さい」

50人程の生徒ですし詰め状態の教室を教壇から見つつ福原先生が確認を取る、するとクラスメートが次々と不備を申し出た、

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺のちゃぶ台の脚が折れてます」

「木工ポンドが支給されてますので、自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

不備を申し出る生徒が多数いた、当たり前かこんな不備の塊のような教室なんだもの。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

古い畳のせいか教室全体がかび臭い、そんな中に50人程の生徒が座っている様は異様かもしれない

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生の指名で廊下側の生徒が立ち上がる、おや？見知った顔だ、

「木下 秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

秀吉か、確かに僕達と同じような成績だったな、部活に専念しているからかもしれないな、

「と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

自己紹介を微笑みで締めた秀吉に周りの何人かの生徒が魅了されている、

確かに秀吉は女の人みたいな顔してるけどさ、れっきとした男だって事皆知ってる筈なのに。

そう考えていると次の生徒が名乗りをあげていた、お、また顔見知りだ、

「・・・・・・・・土屋 康太」

・・・短かつ！

まあ仕方ないかムツツリーニだし、目立つと趣味と実益を兼ねたムツツリ商会在運営しにくくなるだろうし。

それにしても類友とはこの事なのか、2人連続で顔見知りだ。

「ーーです。海外育ちで、日本語は会話できるけど読み書きが苦手です」

ん？ああ考え事してたら次の人に変わってる、

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味はーー」

へええ、初めて女子の女子の声だ、でもなあこの声にも聞き覚えがあるんだよな、確かこの人の趣味は・・・

「趣味は吉井 明久を殴ることです」

そうそう、確かにピンポイントで危ない趣味だった。

「はろはろー」

趣味を暴露し笑顔を明久に振る舞うのは『島田 美波』、この人も去年からの顔見知りだ、ここまで顔見知りが揃う所を見るとやはり『類は友を呼ぶ』は本当なのだろう。

島田さんの後も淡々と自己紹介が進んで行き僕の番になった、僕は今までの人と同じように立ち上がる、

「沢渡 真琴です、今年1年宜しくお願いします」

微笑みながら僕は簡単に挨拶する、別に知ってる顔ばかりだし適当でも問題は無いと思う、ふと周りを見ると男子の一部が顔を赤くしている、何故だろうか……？

「……です。よろしく」

僕の後ろの人の自己紹介が終わったらしい、確か次は明久だったかな？

「……コホン。えーっと、吉井 明久です。気軽に「ダーリン」って呼んで下さいね♪」

『ダアア……リイーン!!』

……明久はやっぱり馬鹿だ、この世の中の誰がこんな野太い『ダーリン』を聞きたいだろう、可愛い女の子になら呼んでほしいけど。

「……失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願い致します」

明久自身も相当堪えたらしく固い声で自己紹介を終え座った、

それにしても暇だなあ、何だか眠くなってきた、寝ようかな。

等と思っていると教室のドアが開く音が聞こえる、僕を含めた生徒の殆どがドアの方を見ると、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん……………」  
『えっ？』

僕を含めた教室内の殆どの生徒が疑問の声を上げた、その中で表情一つ動かさない福原先生が女子生徒に話し掛ける

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんをお願いします」

「は、はい！あの、姫路 瑞希といいます。よろしくお願いします……………」

性格なのかそれともこの廃屋のような教室の中にいる怪しげな連中にびびっているのかは知らないけど凄く緊張しているなあ……………  
・って考えるべきはそこじゃ無い、

確かにその辺のアイドルも目じゃないような容姿だけどそこでも無い、彼女の登場で場がざわついているのは全員が同じ疑問を抱いているからだ、

「はいっ！質問です！」

男子生徒が高々と右手を挙げる、その勢いに姫路さんは身を縮こませる、

「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

僕達の疑問は名も無い生徒の一見イジメととれるにこの質問に集約されている、勿論イジメ等では無く本当に彼女がここにいるのを疑問に思ったのだ、

彼女『姫路 瑞希』はこの文月学園2年生の中でもトップクラスの成績を誇り、誰もがAクラスになって当たり前だと思っていた筈だ。

「そ、その……………」

緊張で身を硬くしながら姫路さんが応える、

「振り分け試験の最中、高熱を出してしましまして……………」

姫路さんの言葉にクラスの皆は納得する、文月で行われる振り分け試験とはその名が示す通り2年から上の生徒のクラスを成績順、つまりはA～Fのどれかのクラスに振り分ける為の試験だ、

クラス分けの試験の為、いくら悪い点数をとろうが本来的には成績には関係無い、だからかは分からないが振り分け試験はやり直しが効かない一発勝負なのだ。

「そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

姫路さんの説明を聞いたクラスの皆からちらほらと言いつきが上がる、やはりバカだらけだ。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中を姫路さんは逃げるように明久と雄二の隣の座布団に座った。

それからまた自己紹介が再開される、後ろで雄二、明久それに姫路さんが何やら話しているな、と突然明久が大きな声を出す、

「ねえ雄二！残りの半分は！？」

あゝあ、何があったかは分からないけどそんな大きな声を出したら、

「はいはい、その人達、静かにしてくださいね」

やっぱり福原先生が注意してきたよそれも教卓を叩きながら、

「あ、すいませー」

バキィツ バラバラバラ・・・

軽く叩いただけで教卓が崩れ落ちた、福原先生は気まずい表情になる、

「えー・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」

生徒達に告げると、福原先生はその身に悲哀を纏いながら足早に教室から出て行った。

福原先生が退室してすぐ雄二と明久が一緒に教室から出て行った、その時見た明久の顔はいつに無く真面目に見え妙に気になった、

雄二と明久は教室の前の廊下で何やら話しているらしい、僕は明久の真面目な顔が気になり教室のドアの辺りに移動しさりげなく耳をそばだてる。

「・・・姫路の為、か？」

「ど、どうしてそれを!？」

「本当にお前は単純だな。カマをかけるとすぐに引つかかる」

ふんふん、何か面白そうな話だな、もうちょっときいていよう、  
と思ったら、

「お前もそう思うだろう、真琴」

あつ、バレてたんだ……

バレていたのでは仕方ない、僕はドアを開け明久と雄二の前に立つ、

明久は驚いた表情で僕に問い掛ける、

「ま、真琴！ど、何処から聞いていたの！？」

明久の驚きように僕は吹き出しそうになるのを堪えながら返した、

「雄二が『姫路の為、か？』って言った辺りからだよ、明久は姫路さんの為に何をする気なのかな？」

逆に明久に問い掛けると明久の代わりに雄二が答えた、

「明久は姫路の為に試召戦争をやりたいって言ってんだ」

雄二が言っていると明久が声を上げる、

「べ、別にそんな理由じゃー」

「はいはい。今更言い訳は必要ないからな」

「だから、本当に違っつてば！」

明久の抗議を雄二は全然取り合わない、そりやそうだ必死の明久の反応が逆に雄二の話の肯定になっている、

・・・駄目だ、2人のやり取りで笑いそう、

「はははっ！ご、ごめん先に入ってるね！」

堪えられず僕は笑いながら教室内に戻った、僕が戻って少し経ち雄二と明久が戻ってくる、その後ろから代えのこれまたボロボロの教卓を抱えた福原先生が入って来て、自己紹介が再開される、

「えー、須川 亮です。趣味はー」

そのまま淡々と退屈な自己紹介が続いていき、ついに最後になった、最後はクラス代表の雄二だ

「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

福原先生と呼ばれて雄二が教壇までゆつくりと歩み寄る、その姿はまさしくクラスの代表然として何時ものふざけている雰囲気はまるで無かった、

「坂本君はFクラス代表でしたよね？」

福原先生に問われ、自身たつぷりに頷く雄二。

Fクラス代表と言ったって学力最低クラスではたいしたことない、でも何で雄二はあんなに自身に満ち溢れているのだろうか？

僕の疑問は露知らず雄二は口を開く、

「Fクラス代表の坂本 雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

やはりあまり注目されていない、当たり前だ所詮はFクラス、この中で少し成績が良くても周りから見れば皆同じようなものだ。

「さて、皆に一つ聞きたい」

だが、たいしたことない筈の雄二の話に皆が引き込まれていた、

皆の視線が自分に向けられているのを確認した雄二自身の目線は教室内の備品を一つ一つ眺めて行く、

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

つられて皆同じように雄二の視線を追う、一通り見渡す、

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

一呼吸おいて雄二がつげる

「――不満はないか？」

『大ありじゃあつ！！』

2年Fクラスに魂の叫びが響き渡った。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そつだそつだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる」

皆の不満の声が溢れ出る、

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

クラスメートの反応に雄二は自信たっぷりの不適な笑みを浮かべる、僕は雄二のその不適な笑みを見て何故雄二があんなに自信に満ち溢れているのかわかった気がした、

多分雄二は確信を持っているんだ、このクラスの力ならAクラスに勝てる自分ならこのクラスを勝たせる事が出来ると、だから雄二は皆に告げる

「これは代表としての提案だが――」

これから1年間共に戦っていく仲間たちに野生味溢れる八重歯を見せ、

「――FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

こうしてFクラス代表、坂本 雄二は戦争を引き金を引いた。

## 第2話 自己紹介（後書き）

お読み下さりありがとうございました、

お氣が向きましたら感想、評価よろしくお願いします。

## 今更ですが主人公設定（前書き）

タイトル通り今回は主人公設定なので別に本編には関係ありません、特に見なくても問題が無いのでスルーしていただいて構いません

## 今更ですが主人公設定

どうも、『バカとテストと転生者』作者の斎藤です、我が駄文を読み返してみても主人公の容姿や性格なんかがわかりづらいなと思いましたが、この場で借りて主人公設定を発表します、このような中途半端な時期に発表する事を深くお詫びします。

では設定です

名前 沢渡 真琴

身長 155

好きな物 温泉 漫画、ゲーム、

嫌いな物 ユニツトバス 勉強

趣味 特技 多数（やってみたいと思った事は何でもやる為）

容姿 華奢で女顔、黒いというか漆黒の髪を伸ばしている、目の色も漆黒。

詳細 『バカとテストと転生者』の語り役兼主人公雄二の幼い頃からの友人で中学校時代も共に喧嘩に明け暮れた、とは言っても真琴は逃げ回る事が多かったが・・・。

文月に入學してから喧嘩をしないように心がけている

秀吉と同じような女顔をしているが本人に自覚無し。

周りから『100の技を持つ音』と言われるくらい多芸だが真琴が出来ることは殆どの人が練習すれば出来るようになる物ばかりで才能に溢れている訳ではない。

両親が海外にいるため現在一人暮らし、そのため自炊をしているが出来る料理はブタ汁、カレー、けんちん汁と野菜炒めのみで目下練習中、ただしカレーにはこだわりがあり美味しく作れる。

今更ですが主人公設定（後書き）

ありがとうございました

### 第3話 作戦会議？（前書き）

二日連続投稿です、駄文ですがよろしくお願いします。

### 第3話 作戦会議？

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my  
grandmother had used regularly  
」

姫路 瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋 康太の答え

「これは  
」

教師のコメント

訳せのはThisだけですか。

吉井 明久の答え

「  
●  
」  
「♪ \*  
x  
」

できれば地球上の言語で。

沢渡 真琴の答え

「私の 祖母が 本棚です」

教師のコメント

祖母は大切にしてください。

我らが代表が提案したAクラスとの試召戦争。

あまりに現実味の無い提案にクラスの皆は絶望の声を上げる。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらない」

皆の言葉から分かるようにAクラスとFクラスにある戦力差は大きい、いや大きい所か普通なら戦争をしようとすら思わだいだろう。

そもそもこの文月学園のテストには上限と言うものがない、生徒は一時間の制限時間のなか無制限の問題を解いていくのだ、

問題が無制限なのだからやる人によつては一つの教科で500点近い点数をとる人もいる、反対に無制限なものにも関わらず60点くらいしかとれない人もおり、普通のテスト以上に個人の能力によって点数の差が激しくなっていく。

さて試験召喚戦争というのはそのテストの点数をそのまま戦闘力に置き換えられた『召喚獣』と呼ばれる非常にファンタジックな物を、使い戦うというものの、

勿論点数が高い人の召喚獣の方が強い、僕達はFクラスつまり最低クラス、そしてAクラスは最高クラス、その差は歴然だ、まともにぶつかったらAクラス一人にFクラスは複数でかからなければならぬだろう。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

その差を知りながら、雄二は宣言する

「何を馬鹿なことを」

「できるわけないだろう」

「何の根拠があつてそんなことを」

教室内の皆から否定的な意見が飛び出る。

確かに普通ならどうあっても敵う分けないだろう僕は雄二なら何とかなるだろうと思っっているがそれとて何か根拠があるわけではない、強いて根拠を上げるなら雄二の自信に満ちた態度だけどそれじゃ根拠とは言わないよね。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

自信満々に言い放った雄二にクラス全体のざわめきが大きくなる

「それを今から証明してやる」

不適に笑い壇上から皆を見下ろす代表、

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死にスカートを覗いていないと体で表現している男子生徒、しかし頬に畳の後が残っていて覗いていた事は明白だ。

姫路さんはスカートを押さえて少し遠ざかる、

男子生徒は畳の後を隠しながら壇上へと向かった。

あのバレバレの態勢で覗こうとする男子生徒に呆れを通り越して感嘆する。

「土屋 康太こいつがあ有名な『寡黙なる性識者』（ムツツリー二）だ」

土屋 康太と呼ばれた生徒の異名湾聞いてクラス全体がどよめく、

「ムツツリー二だと・・・・・・・・・・？」

「馬鹿な、奴がそうだというのか・・・・・・・・・・」

「だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ・・・・・・・・・・」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・・・・・・・・」

未だ畳の跡を隠そうとしている男子生徒、彼は僕の去年のクラスからのクラスメートで土屋 康太という、異名のムツツリー二とは彼の所業から付けられた異名で男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を以て挙げられる。

つまりはただの『ムツツリスケベ』のことだ。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

姫路さんに視線を送りながら雄二がいう、確かに学年トップクラスの  
の實力は心強い、

「そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

「ああ。彼女さえいれば何もいらないな」

姫路さんにラブコールを送ってる人にはそろそろ黙ってほしい、

「木下 秀吉だっている」

呼ばれたのは美少女顔の男子生徒、学力は僕らと同じようなものだ  
がAクラスに双子の姉がいるとか演劇部のエースだとか話題にはこ  
とかない、ちなみにかれも去年からの知り合いだ。

「おお．．．．．！」

「ああ。アイツ確か、木下 優子の．．．．．」

秀吉に視線が集まる、だが秀吉は以外と平気そうだ流石演劇部だな、  
再び雄二が口を開く、何か目が僕の方を向いているような、

「沢渡 真琴もいる」

だあ！やっぱり呼ばれた！

周りの人達も頭に疑問を浮かべているよ、

「『100の技を持つ男』と言えば分かるか？」

雄二が言った僕の異名？だろうか、に皆が納得の声を上げた、

「そうか、あの……！」

「聞いたことあるぜ！」

「結構可愛いな」

ここまで知られてるとは思わなかった、確かに色々と出来るように練習はしてるけど、まさか異名まであるとは……、

そして最後の人は誰だろう、見つけたら殴ってやる。

「当然俺も全力を尽くす」

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！」

クラス全体が前向きな雰囲気になり、Aクラスとやれそうだと勝てそうだと士気が上がっていくのがわかった。

そして――

「それに、吉井 明久だっている」

一気に下がった、

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要ないよね！」

「誰だよ、吉井 明久って」

「聞いたことないぞ」

「ホラ！折角上がりかけてた士気に陰りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを――って、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

明久が必死に訴える、確かに明久の言う通りここで明久の名前を出す必要がない、

そもそも明久の噂はろくなものじゃないのが殆どだ、その最たるものが明久の肩書だろう、

「そうか。知らないなら教えてやる。こいつの肩書は――」

まさか？まさか、言うの？アレを！？

「――こいつの肩書は『観察処分者』だ」

あゝあ言っちゃった……………

「……………それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

誰かが明久に追い打ちを掛けるような台詞を言う、

「ち、違っよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で！」

明久は慌てて取り繕う、だが、

「そうだ。バカの代名詞だ」

雄二があっさりと認めた、

「肯定するなバカ雄二！」

『観察処分者』とは学園一の問題児に課せられるペナルティーの事だ、毎年必ずいる訳ではなく、

どんな問題児でもこのペナルティーを課せられた生徒は滅多にいない、

それがバカの代名詞と呼ばれる由縁なのだ。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路さんが疑問の声を上げる、確かにトップクラスの彼女には全く関係がない言葉だろう、

「具体的には教師の雑用係だよ、物に触れる特別な試験召喚獣で教師の代わりに力仕事なんかをやるんだ」

姫路さんに説明する、姫路さんの目が子供のように輝きだした、

「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」

姫路さんが羨望と尊敬を込めた視線を明久に向ける、

何故、姫路さんがそんな視線を明久に向けているのかというと、一般の召喚獣は物に触れる事が出来ない仕様だということに起因する、召喚獣の力は人を遥かに凌ぐ例え僕が呼び出した召喚獣でもコンクリートをぐらいなら容易に碎ける筈だ、そんな力を持つ召喚獣が物に触れる事が出来る、それは確かに便利だろう、ただし

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」

だが明久は姫路さんの賞賛の言葉と視線を苦笑いを浮かべて否定する。

物に触れる事が出来る召喚獣を持つのは観察処分者だけだ、そこから予想出来るように物に触れる事が出来ると言ってもそれは教師の監視の下でだけだ、

そんな状況で自由に召喚獣を扱えるわけがない、

あくまで観察処分者はペナルティーなのだ。

観察処分者は召喚獣の痛みや疲れ等の何割かが自分にフィードバックするらしい、つまり、

「おいおい、観察処分者って事は試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？」

「だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな」

そついう事、明久もあまり戦闘に出る気はないと思う、

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな？」

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すっごい大胆に無視された」

明久の思いを無視して雄二が話を進める、やっぱりこの二人は面白いな、

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

雄二の名演説にクラス全体が乗せられもう誰にも止められなくなっている、このテンションならどうにかなるかもしれない。

「お、おー……………」

……皆に合わせて小さく拳を掲げていた姫路さんを可愛いと思っ

てしまったのは秘密だ。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

雄二が厳かな口調で明久に命令する、でも大丈夫なのかな？

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

明久も同じことを思ったらしく不安で一杯の顔で雄二に聞く、

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ行ってみる」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

力強く言い切る雄二、だが僕は知っている雄二さ明久を嵌めるためには鬼にも悪魔にもなれると、

「あ、あの明「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

辞めたほうがいいと言おうとしたら雄二に割って入られた、

今の雄二の言葉で明久は使者になることを決心したらしく真っ直ぐに雄二を見据える、

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

クラスメートに歓声と拍手で送り出される明久の背中に僕は両手を合わせていた。

「騙されたあつ！」

生傷だらけで制服をボロボロにした明久が教室に駆け込んできた、その様子だと酷い目にあっただけ、やっぱり・・・

「やはりそうきたか」

平然と言う雄二の背中に悪魔の羽を見た気がする。

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれるよ！」

今回は明久の言う通りだと思う、まあ明久は丈夫だし怪我もたいしたことはないだろうけど、

明久の元に姫路さんと島田さんが向かう、明久は心配をかけまいとしたのか「大丈夫」と言う、その後の島田さんの言葉が凄かった。

「そう、良かった・・・・・・・・。ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・・・・・・」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

・・・島田さん、君は鬼か？

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

ミーティングは別な場所で行うことにしたらしく雄二は教室から出て行く、

「明久、ご苦労様」

僕は明久に声を掛け雄二を追いかけた。

「雄二、いくら何でも酷くない？」

屋上へ向かう道すがら僕はさっき思った事を雄二に言う、

「ん？明久の事か？」

「うん」

「まあ、あいつなら大丈夫だろう」

それだけ言つて雄二は口をつぐむ、雄二は雄二なりに明久を認めて  
いるってことかな？

僕も黙つて雄二に続き屋上へと出る、快晴の青空が目染みて僕等  
は目を細めた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二が近くの段差に腰掛ける、僕達もそれぞれ腰を下ろした。

「一応今日の午後に関戦予定と告げて来たけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「じゃあ、明久、今日ぐらいはまともに食べなよ」

「そう思つたらパンでもおごつてくれると嬉しいんだけど」

僕、島田さん、明久の会話を聞いていた姫路さんが驚いたように明  
久を見る、

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

ま、普通はそう受け取るよね、

「いやー応食べてるよ」

「……あれは食べてると言えるのか？」

雄二が明久に横槍を入れる、姫路さんを除いた僕らの思いを雄二が代弁した形だ。

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って……水と塩だろう？」

雄二が哀れむような声で言う。

それに対し明久は憤慨したような表情を浮かべた、

「きちんと砂糖だって食べているさ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

皆が明久を優しい目で見守る。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

明久も僕と同じように一人暮らしだ、だが生活能力は皆無で食費までも無くしてしまう有様だ、

「・・・・・・・・あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

そんな清貧（なのか？）生活の明久に救いの手が差し延べられた、

「え？」

「明久、字が古いよ」

明久の表情が一気に明るくなった、

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

明久、それはどうかと思う・・・・・・・・

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

雄二がからかうが有頂天の明久は気にも留めない、

「・・・・・・・・ふーん」

と面白なさそうに島田さんが口を開く、

「瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

かなり刺のある口調だ……まあそうなるのも当たり前か、島田さんも明久の事気にしてるからね。

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね」

島田さんの横槍で姫路さんが皆に作って来ることになった、僕達合わせて七人分、かなり大変そうだ、

でも姫路さん少し残念そうだ、やっぱり姫路さんも明久の事を……  
……少し羨ましいかな

「わかりました。それじゃ、皆に作ってきますね」

作る事自体は嫌ではないらしい、料理が好きなのか、これは期待できるかも

「姫路さんて優しいね」

明久が言う、ん？明久の様子がおかしい、

「そ、そんな・・・・・・・・・・」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き――」

って、告白！いくらなんでも早過ぎないか！？

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「――にしたいと思ってました」

・・・何この変態？

「明久、それだだの変態だよ」

仕方ないので教えて上げる、こんな発言するとは予想外だった。

「明久。お前はたまに俺の想像を越えた人間になるときがあるな」

流石の雄二もア然としている、明久は泣きそうだ。

「だって・・・・・・・・お弁当が・・・・・・・・」

そのまま沈む明久を無視して雄二が話しはじめる

「さて、話がかかり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

そうだった、そのために集まったんだっけ。

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

秀吉と姫路さんの疑問に雄二は頷く、

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

今度は明久だ。

確かに明久の言う通りEクラスはFクラスより上だ、なのに戦うまでもない相手なのか？

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないがな。けど実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

「えーっと……………」

雄二に言われ明久は僕達を見渡す、

「美少女三人と馬鹿が二人とムツツリが一人いるね」  
三人？

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!？」雄二が美少女に反応するの!？」

「・・・・・・・・・・(ポッ)」

「ムツツリーニまで!？どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない」

「それに明久、女子は二人だよ」

何で雄二と康太が反応するんだろうか？ノリであることを祈りたい。

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニ」

秀吉が割って入る、

「そ、そうだな」

「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツツコミ入れたいんだけど」

「ま、要するにだ」

再び明久の発言を無視しつつ雄二が説明を再開する。

「姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「じゃあ、Dクラスは簡単には勝てないんだ？」

雄二の説明でこれだけはわかったことを確認の為聞いてみる、

「ああ、確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

確かに目標はAクラス、Dクラスと戦ったって意味があるようには思えない、明久の言う通り始めからAクラスを狙えばいい筈。

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

成る程、ちゃんと考えているのか、流石は元神童。

「あ、あの！」

と、今まで雄二の話を聞いていた姫路さんが大きな声を上げる、珍しいな。

「ん？どうした姫路」

「えっと、その。さっき言いかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

姫路さんが真剣な表情で聞いてくる、

「さっき、明久が姫路さんの……モゴモゴ」

「真琴は黙ってた！」

姫路さんに説明しようとしたら明久に口を塞がれた、くそのシャイボーイめ！

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

明久の心配そうな声、だが雄二はそれを笑い飛ばす、

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

はつきり勝てると言い切る雄二、皆は雄二を黙って見つめる、

「いいか、お前ら。ウチのクラスは――最強だ」

その言葉で皆の迷いは消え思いが一つになる。

「いいわね。面白そうじゃない」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ！）」

「が、頑張りますっ」

あまりにも絶望的な打倒Aクラス、だがそれでもやる前から諦めてちやどつしようもない。

僕達は陰しく困難な戦いを始める決心をした。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう――だがその前に」

雄二が僕と明久の方を向く、

「明久、いい加減真琴を解放したらどうだ？」

「えっ、あ、ゴメン！」

「ぶはあ、苦しかった！」

「全く、それじゃ改めて作戦の説明をするぞ」

春風がふく屋上で僕達は雄二の作戦に耳を傾けた。

### 第3話 作戦会議？（後書き）

お読み下さりありがとうございました、よろしければ評価、感想を頂戴できれば幸いです。

#### 第4話 試験召喚戦争！（前書き）

かなりの駄文なのでお気をつけください。

#### 第4話 試験召喚戦争！

問 以下の問いに答えなさい。

『(1)  $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する  $X$  の値を一つ答えなさい。

(2)  $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、 $?$   $?$   $?$ の中から選びなさい。

$$? \sin A + \cos B$$

$$? \sin A - \cos B$$

$$? \sin A \cos B$$

$$? \sin A \cos B + \cos A \sin B$$

姫路 瑞希の答え

$$『(1) X = \pi / 6$$

$$(2) ?』$$

教師のコメント

そうですね。角度を『 $^\circ$ 』ではなく『 $\pi$ 』って書いてありますし、完璧です。

土屋 康太の答え

『(1)X〓およそ3』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井 明久の答え

『(2)およそ?』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

沢渡 真琴の答え

『およそ?????』

教師のコメント

最低限どれか一つを選びなさい。

Aクラス打倒の為の第一歩のDクラス戦が始まった、

僕は秀吉率いる部隊に配属され戦争の最前線に立っている。

「Dクラスの奴らじゃ！ここで引けぬぞ、突撃じゃ！」

渡り廊下の辺りで接触したDクラスの部隊を前にして秀吉の激が飛んだ、

「「「試験召喚！！」」」

それを合図に部隊の仲間達が召喚獣を呼び出す、

「「「試験召喚！！」」」

Dクラスも同じように呼び出した、

「真琴、わしら行くぞ！」

「勿論！」

秀吉と僕も口を開く、

「「<sup>サモン</sup>試験召喚！！」」

僕らの前に幾何学の魔法陣が出現する、教師が試験召喚を許可した証だ、

そして現れる召喚獣。

秀吉の召喚獣は袴をはいて薙刀を装備した姿、和風な見た目で格好良く思える。

それに比べ僕の召喚獣は迷彩服にトンファーという妙な取り合わせ

だった。

僕は召喚獣に右手のトンファーを半回転させ棍棒のように握らせる。  
準備は整った、僕と秀吉は乱戦を中へ召喚獣を飛び込ませた。

「さあ来い！この負け犬が！」

「て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！」

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな」

「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立上げてやるっ」

「お、鬼だ！誰か、助けっ——イヤァ——」

また一人補習室へ送られた！さすがに2ランク上のクラスだ、手強いな……

「よそ見してていいのかよ！」

そんなことを考えていたらDクラスの生徒に切り掛かれた、

「なんの！」

僕は左手のトンファーで攻撃を受け流し右手のトンファーで突く、  
だが点数は相手の方が上の為たいしたダメージにはなっていない、

『Fクラス 沢渡 真琴 総合教科 850点

VS

Dクラス 黄川田 夏彦 1020点』

点数が表示される、やっぱり相手の黄川田君の方が点数が高い、

再び黄川田君の召喚獣が武器を振りかぶる、僕は右手トンファーを  
元の握らに戻し身を守る態勢を作る、

「死ねえ！」

「くっ！」

黄川田君の攻撃を受け止めるが力の差で押さえ付けられ身動きがと  
れない、

「雑魚のくせにしぶといな」

黄川田君が呟き召喚獣に更に力を込めさせる、僕の召喚獣は押し潰  
されそうになるが――

「真琴！今助けるぞい！」

——タイミング良く現れた秀吉が黄川田君の召喚獣を薙刀で切り付けた、

「何！？木下か！」

黄川田君の注意が削がれる、僕は召喚獣を密着させトンファーで連打する、

「うおりゃあ！」

「なっ、しまっ」

その連打で黄川田君の召喚獣の点数は0になった、

「え、Fクラスに負けるなんて……」

黄川田君はその場に崩れ落ちる。

落ち込んでいる黄川田君に更に西村先生が追い打ちをかけた、

「戦死者は補習室へ！」

「なっ！鉄人か！？くそ覚えておけよ沢渡 真琴お！」

悪役のような捨て台詞を残し黄川田君（多分もう出番はないだろう・・・）は西村先生に引きづられて行く。

「決して一人で戦うでないぞ！お互いフォローしあうんじゃ！」

「了解！！」

大声で指示をだす秀吉に力強い返事を返す仲間達が頼もしいと思う。

僕らのモチベーションは依然高いままだが徐々に戦力差が広がっていく、秀吉も僕の召喚獣ももうヘロヘロだ、もう限界かも知れない。

「おい、Dクラスの奴ら五十嵐と布施を呼びやがった！」

Dクラスが化学担当の五十嵐先生と布施先生を連れて来ている。

ただでさえ苦しいのにこれはまずい。

「後退じゃ！」

確かに秀吉の判断は正しいだろう、仲間達も秀吉に続いて後退していく、

秀吉が僕に視線を送って来る、僕は秀吉に頷き後退する前線部隊の最後尾についた、

「二年Fクラス沢渡 真琴、ここにいるDクラス生徒全体に化学で勝負を申し込みます！」

秀吉達を追おうとしていた奴らが足を止める、

「行くよ、試験召喚！」

「」「試験召喚！」「」

『Fクラス 沢渡 真琴 化学 89点

VS

Dクラス 総合教科

A 85点

B 92点

C 90点』

「何だ、わざわざ残ったんだから強いかと思ったけどたいしたことないな」

「トカゲの尻尾切りか」

「ちゃっちゃんとやろうぜ」

Dクラスの奴らが蔑むように口々に言い放つ、僕はそれらを無視してトンファーを構えさせた、

「いくぜ！」

Dクラス生徒Aが突っ込んでくる、僕は召喚獣にあしらいをさせる、

「何！？」

「何やってんだよ、俺に任せろよ！」

生徒Bが武器を突き出して来た、それを受け流し一撃を加える、

「は？」

「お前ら情けねえな！俺に任せとけ！」

生徒Cが威勢のいい台詞をの割には慎重に様子を見ている、

その様子に僕は笑いを浮かべた、

「何がおかしいんだよ！」

戸惑っている生徒Cに僕は一気に近付き攻撃する、

「でやあ！」

「ちいつ！」

思わず後退する生徒C、さっきまでのナメた表情は無くなり真剣な色を浮かべる、

「お前ら同時にいくぜ」

三人は一斉に飛び掛かろうとする、だが、

「「「待った!」」」

突然の静止の声、

「何だ、一体!？」

「「「試験召喚!!」」」

「Fクラスの別動隊か!」

見ると明久率いるFクラス中堅部隊がこっちに来ていた、

「良かった」

来るまで生き残れた事に一安心する、

『Fクラス 化学

A 75点

B 62点

C 80点

D 79点』

点数が表示される、誉められたものじゃないが今は心強い、

「残念だったね、僕を倒せなくて」

苦々しい顔をしているDクラスの三人に話し掛ける、

「てめえ、さっきの笑いはこうなると予測してたって事か」

「のっけからまともにやる気はなかったんだな」

「やってくれたな」

三人はくやしげに言う、

「形勢逆転だよ、覚悟は良いかな？」

僕とFクラスの仲間達は召喚獣を身構えさせ――

「突撃だ！」

「「「うおおお！！」「」「」

一気に飛び掛かった、

「「「うわああ！！」「」

三人はあっという間に点数が0になる、

「さあ、補習だ！」

「「「ちくしょう――！！」「」

西村先生に連れて行かれる三人に合掌し僕は点数を補充するために

教室へ向かう事にした。

「おお、真琴！無事じゃったか！」

教室へ帰るや否や秀吉が声をかけてくる、

「ほっとしたのは分かるけど今補充中だからそっちに集中しようか？」

「む、それもそうじゃな」

今はまだ戦争中、無事を喜ぶのもはしゃぐのも決着がついてからだ。

僕は座布団に座りテスト用紙と向き合った。

テストを受け始めて結構経った辺りに明久の部隊に所属している須川君が帰ってきた、

須川君は雄二と一言三言会話するとまた出て行ってしまっ、

残された雄二は邪悪な笑いを浮かべているよに見えた

一体何しに来たんだろう、

そして何をする気だろう

、

ピンポンパンポン

《連絡致します》

須川君が出て行ってすぐ校内放送が始まった。

・・・ん？この声って？

《船越先生、船越先生》

うん、やっぱり須川君ださっきここに来たのは雄二に作戦を聴くた  
めかな。

《吉井 明久君が体育館裏で待っています》

あれ？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

船越先生って確か今年四十五になる女の先生だったよね、まだ独身で婚期を逃した焦りからか単位を盾に生徒に交際を迫ってるあの先生だよな？

さっきの話し合いはこれか！？何て酷い事を！

船越先生を封じる必要があつたんだろうけど・・・やっぱり雄二は明久を嵌めるの好きだなあ、

まあ、クラス全体の士気も上がってるし、観察処分者のためにおいそれと戦う事が出来ないから、仕方ないかな。

とりあえず明日の明久の無事でも祈ろうか。

「補充は終わったか？」

調度テストが終わった頃雄二が皆に問い掛ける。

とりあえず前線部隊は皆終わっている筈だ。

「わしらは終わっておるぞ？」

僕達の部隊の隊長である秀吉が答える、

「なら中堅部隊の援護に行くぞ、ついて来い！」

颯爽と教室から出て行く雄二に続き僕達は再び戦場へ向かった。

雄二率いる援軍が中堅部隊を目視した時にはDクラスの猛攻により中堅部隊は壊滅寸前だった。

「明久、あと少し持ちこたえろ」

苦戦中の明久に雄二が檄を飛ばす。

明久の反応を見るとどうやら聞こえたらしい、結構距離はあったのに聞こえたなんて雄二の声って良く通るなあ。

合流されると厄介だと思ったのだろうDクラスの攻撃が激しくなった。

全速力で中堅部隊へと向かうがまだ遠い、持ちこたえられるだろうか？

そうこうしているうちに中堅部隊がどんどんやられていきついに明久も召喚獣を呼び出さなければならなくなった。

「試験召喚！」

高らかに叫ぶ明久の足元に魔法陣が顕れる。

特攻服を着て木刀を持ったヤンキーみたいな召喚獣が顕れる。

敵が突っ込んでくる正面に・・・だけど。

案の定、明久の召喚獣は相手と激しくぶつかり倒れた。

倒れた明久の召喚獣に襲い掛かるDクラスの召喚獣。

「危ない、やられる！」

思わず叫びが出た・・・が予想に反して明久の召喚獣は抜群の動きを見せ危機を脱する。

「ああっ！霧島さんのスカートが捲れてるっ！」

必殺のつもりだったろう攻撃を上手くかわされて驚く相手を尻目にDクラスの後ろを指差し明久が叫ぶ、

「・・・なにいつ!?!」

流石才色兼備のAクラス代表、その効果は目覚ましくDクラスの男子だけでなく女子も振り返った。

・・・・・・・・おかしくない？

まあ、いいや。

何故女子が振り向いたのかは分からないが今は明久の下へ急ぐのが先決だ。

というか何でこんなに廊下が長いのだ！

学校の廊下の適切な長さについて考えていると突然ガラスが割れる音がした、見るとDクラスが混乱している。

どうせ明久がやったんだろう、こういう時には機転が効くんだよなあ。

「うわっ！島田さん！そんな物をどうする気だよ！」

明久のそんな声が聞こえ、消火器の粉末が視界を遮る。

島田さんは教室にいるため明久の言葉は保身用の小芝居だろう。

・・・明久、怒られても知らないよ？

「う、うわっ！なんだ！？」

「ぺっぺっ！こりゃ消火器の粉じゃねえか！」

「前が見えない！」

現場の混乱は極まり阿鼻叫喚の様相を呈してきた。

「島田さん、キミはなんてことを！」

どうしても島田さんのせいにしたらしい、あんな痛い目に遭わされてたんじゃ仕方ないかもしれないけどさ。

「Fクラスの島田め！なんて卑怯な奴なんだ！」

「許せねえ！彼女にしたくない女子ランキングに載せてやるからな！」

「そつだ！在学中には彼氏のできない状況にしてやる！」

「……でも、男らしくてステキ……。お姉さま……」

「……明久、死んだな……。」

ようやく近くに来れた、とりあえず今は明久を助ける事が出来そう  
だ。

今は………だけど。

「だあああつ！」

気合いを入れ今度はスプリンクラー目掛けてぶん投げる明久。

消火器は吸い込まれるようにスプリンクラー当たった。

スプリンクラーから水が噴き出し消火器の粉末を落とす。

「待たせたな、吉井！五十嵐先生！Fクラス、近藤 吉宗が行きます！」

開けた視界の中、雄二の親衛隊の近藤君が勝負を挑む。

『Dクラス 中野 健太 化学 43点

VS

Fクラス 近藤 吉宗 91点』

「くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！」

「深追いはするな。俺達も明久の部隊を回収したら一旦戻るぞ」

撤退するDクラスを見逃し僕達も今来た道を戻る。

「さて、無事なようだな明久」

「うん、まあね」

明久もどうやらまだ戦えるようだ、決着は近い事を感じながら戦場を後にした。

「明久、よくやった」

教室に戻り補充のテストを受けた明久を雄二が晴れやかな笑顔で褒める。

明久を褒めるなんて雄二らしくないしあんな晴れやかな笑顔を浮かべるなんて絶対じゃない。

つまり雄二は喜んでいるのだ。

では何に喜んでいるのか？

それは勿論。

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ、バッチリな」

明久の不幸を、である。

雄二の返答に憎しみの憤怒の表情を浮かべる明久

「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

だが努めて冷静に雄二に尋ねる明久、だがその表情は先程よりも怖い。

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

そんな明久にあっさり答える雄二。

雄二の答えを聞いた明久は懷に手を入れた、左手にある靴下は砂を詰めたかのように膨らんでいる。

「殺れる、僕なら殺れる………」

「殺るなつての」

殺意に狂った明久に雄二が突っ込む、だが明久の耳には届いてない。

「ちなみに、だが」

憎しみに満ちた明久に雄二が再び話し掛ける、明久は気にも留めない、

「だけどー」

「あの放送を指示したのは俺だ」

「シャアアッ！」

事の真相を暴露した瞬間、明久がとんでもない形相で雄二に襲い掛かった。

これはまずい、少なくともDクラスに勝つまでは雄二に死なれちゃ困るよ。

「明久、船越先生！」

雄二を助けるため嘘をつく、嘘に過敏に反応した明久はこれまた凄い勢いで掃除用具入れに飛び込んだ。

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿め見え始めたし、頃合いじやろう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

「そうだね、行こうか？」

「おっしや！Dクラス代表の首級獲りに行くぞ！」

『おうつ！』

皆で教室から出る。

船越先生がいると思ひ込んでる明久は掃除用具入れから出る気配がない。

「えつーと、明久」

教室のドアの辺りから明久に呼び掛ける。

「船越先生、来てないよ？」

そつ言い残し僕も雄二を追い掛けた。

「下校している連中に上手く溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

下校時間の戦場に雄二の声が響き渡る。

「そつちから回り込め！俺はコイツに数学勝負を申し込む」

「なら、俺は古典勝負を——」

「日本史で——」

雄二の指示通り下校時の人込みに紛れDクラスの人達を取り囲み討ち取っていく我等Fクラス。

「Dクラス塚本、討ち取ったり！」

そんな中Dクラス親衛隊隊長を討ち取って歓声上がる、

今は放課後、先生方も一段落つき暇なので捕まえやすい、だからか

作戦は順調に進んでいた。

だが、戦いの流れは気まぐれだ。

「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

Dクラス代表の平賀君が本隊と共に姿を現した。

「Dクラスの本隊だ！ついに動き出したぞ！」

仲間内から声上がる、これで両クラスとも総力戦だ。

「本隊の半分はFクラス代表坂本 雄二を獲りに行け！他メンバーは囲まれている奴を助けるんだ！」

『おおー！』

平賀君が指示を飛ばす、的確な指示に敵ながら見事だと思う。

「Fクラスは全員一時撤退しろ！人込みに紛れて攪乱するんだ！」

よく通る雄二の声、指示に従い皆が撤退を始める、

「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けはない！追い詰めて討ち取るんだ！」

平賀君その指示により戦いは殲滅戦の様相だ、これはまずい。

ふと自分の周りにDクラスがいないことに気づく、ここなら平賀君がいる場所まで一直線だという事にも気付いた。

「よしっ！」

急いで平賀君へ向け駆け出す僕の視界に反対側から平賀君に駆け込む明久の姿が映った、

平賀君の側には現国教師竹内先生と古典教師向井先生がいる、これならいけるかも知れない。

「向井先生！Fクラス吉井が——」

「竹内先生！Fクラス沢渡が——」

謀らずも明久と同時に口を開いた、だが——

「Dクラス玉野 美紀」

「同じくDクラス大塩 隆一」

「試験召喚！！」

「えっ（なっ）親衛隊！？」

しまった！甘かったか！？

「残念だったな、船越先生の彼氏クンにFクラスの沢渡」

平賀君は既に勝った思っているらしく余裕だ。

「ち、違う！アレは雄二が勝手に」

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さ、玉野さんと大塩彼らに祝福を」

「わかりました」

「了解」

大塩君は召喚獣を呼び出す、向こうでは玉野さんも呼び出していた。

「ちくしょう！あと一步でDクラスを僕の手で落とせるのに！」

「何を言うかと思えば、彼氏くん。いくら防御が薄く見えても、さすがにFクラスの人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう？ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど」

「勿論、沢渡お前もな」

平賀君が偉そうに言う、だが僕と明久は平賀君の背後に走ってくるピンク色の髪を確認した。

僕と明久は勝利を確信し平賀君に応える。

「それは同感。確かに僕には無理だろうね」

「そうだね、確かに僕なんかじゃ駄目だよ、君には勝てないよ」

あっさり無理だと認めた僕達に平賀君は訝しげな視線を送る、

「だから――」

明久は勿体振って一息入れて呼び掛けた。

「姫路さん、よろしくね」

「は？」

「何を言ってるんだ？」と言いたげな表情を浮かべる平賀君の肩を姫路さんが叩く。

「え？あ、姫路さんどうしたの？Aクラスはこの廊下を通らなかったと思うけど」

現状を認識出来ない平賀君を見て僕と明久は顔を見合わせて笑みを浮かべる。

「いえ、そうじゃなくて……………」

言いづらそうに身体を小さくする姫路さん、……………可愛いなあ。

「Fクラスの姫路 瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「その……………Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……………はあ。どうも」

「あの、えつと・・・・・・・・さ、試験召喚です」

『Fクラス 姫路 瑞希

現代国語 339点

VS

Dクラス 平賀 源二

129点』

呼び出された姫路さんの召喚獣はどてかい剣を楽々構えていた、

「え？あ、あれ？」

まだ状況が飲み込めない平賀君も一応召喚するが明らかに勝負は見えてる。

「ご、ごめんなさいっ」

剣を構えながらも素早く平賀君の召喚獣へと踏み込む姫路さんの召喚獣。

たった一閃でDクラス代表平賀 源二の召喚獣を叩き切り、記念すべき初勝利をFクラスへと与えた。

## 第4話 試験召喚戦争！（後書き）

お読み下さり真にありがとうございます。

## 第5話 戦争の合間（前書き）

一日挟みましたが投稿します！

PVが10000を突破しました！こんな駄文を読んで下さり真にありがとうございます。

## 第5話 戦争の合間

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい  
『光は波であって（ ）である』

姫路 瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

『よくできました』

土屋 康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

『君の解答はいつも先生の度肝を抜きます』

吉井 明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

『先生もRPGは好きです』

沢渡 真琴の答え

『りゅう子』

教師のコメント

『これぐらい漢字で書きましょう』

Dクラス代表平賀 源二、戦死

『うおおーっ！』

Fクラスにとっては勝利の雄叫び、Dクラスにとっては敗北の悲鳴が混然なって校舎内に響き渡る。

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本 雄二サマサマだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛しています！」

我等が代表の雄二を称賛する声（一人は違うけど、てか誰が言うてるんだ？）がいたるところから聞こえる。

雄二が立っている所までいくと落ち込むDクラス生徒がFクラスの生徒に囲まれているのが遠くに見えた。

「雄二、やったね！」

駆け寄りFクラスの皆に囲まれている雄二を呼び掛ける。

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつか」

照れているのか雄二は明後日の方向を見る、

「坂本！握手してくれ！」

「俺も！」

英雄扱いの雄二、皆あの教室に不満たらただったもんね……………。

ん？明久も握手に行くのかな……………そんなわけないか。

雄二に駆け寄る明久の手に包丁が握られているのを見て僕は制服のポケットから十円玉を取り出す。

「雄二！」

「ん？明久か」

呼ばれて振り向く雄二に明久は手を突き出した、

「させるか！」

僕はポケットから取り出した十円玉を明久の顔面に向かって投げる。

「あたっ！なんだ一体！？」

顔に十円玉が当たり明久が足を止める、その隙に雄二は明久の手を押さえた。

「雄二………！どうして握手なのに手首を押さえるのかな………！」

「押さえるに決まっているだろうが………！フンッ！」

「ぐあっ！」

手首を捻りあげられた明久は悲鳴とともに包丁を落とす明久、

雄二は黙って明久を睨みつける、

「雄二、皆で何かをやり遂げるって素晴らしいね」

手首の痛みを堪えながら雄二に話しかける明久、だが雄二は黙ったままだ。

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らない関節が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした」

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛いっ!」

「おーい。誰かペンチを持って来てくれ!」

「す、ストップ 僕が悪かった!」

「・・・・・・・・チツ」

雄二は明久を解放する、相変わらずの二人のやり取りを苦笑まじりに眺める。

「真琴、お主さっき何を投げたんじゃ?」

声を掛けられ振り向くと秀吉と康太が立っていた。

「ムッツリーニお主も気になるじゃろう?」

「・・・・・・・・（コクコク）」

僕はポケットから十円玉を取り出し二人き見せる、

「これだよ」

投げたのは十円玉、つまりは投げ銭だということを理解した秀吉と康太は呆れた視線を僕に向けてきた。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

平賀君の声が聞こえ振り返ると雄二の下に歩み寄るDクラス代表の姿があつた。

別な方向から姫路さんも駆け寄り平賀君に頭を下げていた。

確かに卑怯といえは卑怯な勝ち方だったから姫路さんの性格を思えば頭を下げるのもわかるがこれも勝負だ、誰も謝る必要なんてない。

平賀君と雄二は何事か話している、おそらく教室明け渡しについてだろう。

僕が口を挟むような話しじゃない、今は仲間達と一緒に勝利を喜ぶとしよう。

「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくり休んでくれ 解散！」

Dクラスとの話し合いが終わったらしく雄二が号令をかけた。

帰りの支度をするため皆雑談をしながら自分のクラスへと向かう。

「雄二、僕達も帰ろうか」

「そうだな、真琴、行くぞ」

「うん、わかった」

なんとか勝てたけど凄い疲れた、今日は早く帰ろうか。

「あ、あのつ、坂本君っ」

皆の後を追おうとすると姫路さんが雄二を呼び止めた。

「お、姫路。どうした？」

「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです」

少々興奮気味に話す姫路さん、どうやら大事な話らしい。

「おう。わかった」

姫路さんと雄二は僕達から離れたところで話し始める。

姫路さんは真っ直ぐに雄二を見ており僕達のことは目に入っていない。

明久は姫路さんのスカートをちらりと見る……………何か妙な事を考え始めたな。

「坂本君と吉井君って始めからAクラスとの試験召喚戦争をするつ

もりだっ たんですか？」

「ま、元々興味があつたが、きっかけはコイツがそんな相談をしてきたってコトだ」

考え込む明久を他所に雄二と姫路さんはこっちに歩いてくる、

「あの、吉井君がそんなことを言い出した理由って……」

「さて。そういえば、振り分け試験でなにかあつたみたいだが、それと関係があるかもしれないな。バカにはバカなりに譲れないものがあつた、ってコトだろ？」

真剣な姫路さんとは対照的に雄二は楽しげだ、話は断片的にしか聞いてないが多分明久関係だろうな……。当の本人は気付いてないみたいだけどさ。

「振り分け試験ってーそれじゃ、やっぱり」

「俺の口から言って良い範囲はこれが限界だと思うがー多分、姫路の想像は間違っていないと思うぞ」

話しが終わったのか雄二が僕達の方を向く、

「さて明久、真琴、そろそろ帰るぞ」

「あ、うん。姫路さんとはもういいの？」

「ああ。これで決心も固まつただろうし、な？」

雄二が話しをふると姫路さんの顔が真っ赤になった、凄いな・・・。

「ふーん。そっか。よくわからないけど、それじゃ帰ろっか。姫路さん、またね」

わかってないのは明久、君だけだよ・・・。

「あ、はい！さようなら！」

顔を赤くしたままの姫路さんを置いて明久と雄二は教室から出て行く、僕も後に続こうとしたら校内放送がなった。

ピンポンパンポン

《二年F組 沢渡 真琴 二年F組 沢渡 真琴、担任の福原先生が呼んでいるので至急職員室まで来てください》

あれ、何だろう？

「明久、雄二、ゴメン先に行つてて」

「うんわかった、真琴」

「当たり前だ」

明久と雄二を見送り、僕は職員室へと向かった。

二十分後、用事を終えた僕は荷物を取りに行く為に教室へと向かっていた。

「まさか雑用を任されるとは思ってた」

何で明久じゃ無くて僕だったんだろう、謎だ……。

まあ、いいや早く終わったし。

教室の近くまで来たら遠くに見知った後ろ姿を見付けた、

「あれ？明久、帰ったんじゃないかったっけ？」

忘れ物かな？等と思いながら教室に入るとまだ顔を真っ赤にしている姫路さんがいた、手の中には可愛いらしい封筒と便箋ある。

「姫路さん、まだ残ってたんだ」

「さ、沢渡君ですか」

姫路さんに声をかけるとかなり驚いた、その反応に僕は笑いそうになる、

「なななにしてるんですか！？」

「ん？今まで福原先生の仕事の手伝いしてたんだよ、そういう姫路さんは何してるの？」

「は、はわ！べ、別に何も！」

姫路さん、嘘つくの下手だなあ、

「じゃ、僕いくよ、姫路さんまた明日ね」

姫路さんに挨拶して教室を出ようとドアまで行く、

「は、はい、ま、また明日！」

まだテンパってる姫路さん、少しからかいたくなった。

「ねえ、姫路さん」

「は、はい！？」

「その手紙、渡せるといいね・・・その・・・明久に」

「は、はわっ！？」

僕の言葉に赤い顔を更に赤くしてフリーズした姫路さんを置いて教室を出る。

明久――君が羨まし過ぎるよ……………。

今日は大人しく寝よう。

翌朝、僕が少し遅れて登校すると明久が凄い勢いで走って来た、

「おめでとう明久！今日の一時間目は船越先生の数学だよ！」

「真琴なんて大嫌いだ！！」

むう祝福してあげたのに嫌われた、何故だろうか？

等とわかり切った事を考えながら僕は畳と卓袱台と座布団の教室に入って行った。

「はあ、疲れたな」

ただ今昼休み、今日はずっとテストだけだから疲れる事この上ない。

一つ挟んだ後ろでも明久が呻いている、明久は朝から船越先生との修羅場を展開したから余計に疲れているみたいだ。

「うむ、疲れたのう」

「・・・・・・・・・・（コクコク）」

いつの間にか近くに秀吉と康太が来ていた。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯にすっ

かな」

「雄二、お腹壊すよ」

飯に壊さなくても栄養が偏り過ぎだろう。

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「・・・・・・・・・・（コクコク）」

島田さんも一緒に行く事になった、康太が頷いたのは下心ありきだろうな。

島田さんが明久に詰め寄ってるけど、なんで？

「僕はみそラーメンにしようかな」

「じゃ、僕も贅沢にソルトウォーターあたりをー」

「あ、あの。皆さん・・・・・・・・」

明久のおかしな発言をスルーして学食へ行こうと立ち上がったところで姫路さんが声をかけてきた。

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食行く？」

「あ、いえ。え、えっと・・・・・・・・、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の・・・・・・・・」

言いづらそうにもじもじしながら僕達の方を見ている姫路さん、何かあったんだろうか？

さてよ、お昼で昨日の約束・・・・・・・・思い出した！

「ああ！もしかしてお弁当！？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

思い出して叫んだくらいすっかり忘れていた僕を他所に姫路さんは身体の後ろに隠すように置いていたバックを出す。

まさか本当に七人分作ってくるとは思わなかった。

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

この中で最も栄養が必要であろう明久が喜びの声を上げる、雄二も嬉しそうだ。

「そうですか？良かったあゝ」

嬉しそうに笑う姫路さんを見て心が和む。

「むー・・・・・・・・っ。瑞希って、意外と積極的なのね・・・・・・・・」

明久を親の仇のように睨む島田さん・・・・・・・・明久少し怯えてる

よ。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

「そうだね」

秀吉の提案に同意する明久、確かにこんな教室で食べても美味しくないな。

「そうか。それならお前らは先に行つててくれ」

「ん？雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買つてくる。昨日頑張つてくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

雄二と島田さんは財布を持って出て行く、多分売店に行くんだろう、

「きちんと俺達の分をとつておけよ」

「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くならないはずだ。じゃ、行つてくる」

そんな台詞を残して雄二達は出て行った。

「僕らも行くのか」

「そうですね」

明久が姫路さんのバックを受け取り、僕達は屋上を目指す。

「天気良くてなによりじゃ」

「そうですねー」

今日も天気は快晴だ、うーん気持ちいいな。

「あ、シートもあるんですよ」

姫路さんはバックからシートを取り出す、気分はピクニックだ。

「気持ちいいねー」

「……………（コクリ）」

皆でビニールシートの上に座る、春特有の柔らかい風と日差しは気持ちいい。

「あのあんまり自信はないんですけど……………」

そう言いながら姫路さんは弁当箱（重箱か……）の蓋を取る。

「……………おおっ！……………」

中を見た瞬間僕達は歓声をあげる、中にはから揚げやエビフライ、おにぎりといった定番の献立だ。

「じゃ、いただきまー」

「・・・・・・・・・・（ヒョイ）」

「あっ！」

食べようと手を伸ばすと横合いからムッツリーニがエビフライをつまむ、相変わらずやるのが素早いな。

「・・・・・・・・・・（パク）」

そのエビフライを口に運んだムッツリーニは・・・・・・・・、

バタン          ガタガタガタ

倒れた。

それだけじゃなく小刻みに震えている。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

僕は顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!？」

姫路さんが慌てるあまり割り箸を取り落としながら康太に呼び掛けた。

「・・・・・・・・・・（ムクリ）」

康太が起き上がる。

「・・・・・・・・・・（グッ）」

そして親指を立てた、おそらく『美味しいぞ』って言いたいんだろう。

「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

康太の言いたい事が伝わったらしく姫路さんは喜んだ。

だけど康太の足はガクガク震えていてどうみてもまともな状態では

ない。

「良かったらどんどん食べてくださいね」

笑顔で勧めてくれる姫路さん、そんな笑顔で勧められると断れない。

（秀吉、真琴。あれ、どう思う）

姫路さんに聞こえないほどの小声で明久が話しかけてきた。

（……………どう考えても演技には見えん）

（完全に本気だと思うよ……………）

（だよね。ヤバイよね）

（お主ら。身体は頑丈か？）

（正直胃袋には自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから、真琴はどう？）

（明久よりは丈夫だと思うけど、それでも食べたら多分康太みたいになると思う）

姫路さんにこの会話を知られるわけには行かないので僕らの表情は笑顔のままだ。

（ならば、ここはワシに任せてもらおう）

勇気溢れる台詞を秀吉が囁く。

（そんな、危ないよ！）

（秀吉、無理はしないほうがいいよ……）

（大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのだ）

ジャガイモの芽って、確か毒だった筈だけど……意外と丈夫なんだな。

（でも……）

（本当に大丈夫なの？）

（安心せい。ワシの鉄の胃袋を信じてー）

外見とは裏腹にかなり男らしい台詞を口にしようとしたところで、

「おう、待たせたな　へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

雄二が来て卵焼きを手にとった。

「あつ、雄二」

止めようとしたのだろう、明久が口を開くが雄二は卵焼きを口に入れてー

パク

ボタン　ガシャンーガタガタ

ジュースの缶をぶちまけながら派手にぶっ倒れた。

「さ、坂本！？ちよつと、どうしたの！？」

少し遅れて来た島田さんが雄二に駆け寄る。

成る程・・・・・・・・本物が・・・・・・・・。

康太みたいに小刻みに震えながら僕らを睨む雄二、その目は『毒を盛ったな』と訴えているようだった。

『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ』

『雄二、しっかり！』

明久と僕も目で雄二に返事する、付き合いの長い僕らだからこそできる裏技だ。

「あ、足が・・・・・・・・つってな・・・・・・・・」

姫路さんが傷つかないように雄二は嘘をついた、良かった、なんとか大丈夫みたい。

「あはは、ダッシュで階段を昇り降りしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

訝しげな顔をする島田さん、まずいこのままじゃ余計なことをいい  
そうだ、この場合は、

「島田さん、その手についてるあたりに虫の死骸が落ちてたよ」

早々に退散願おうか。

「ええっ！？早く言ってよ！」

「ごめんね、早く手を洗ったほうが良いと思うよ」

「そうね。ちょっと行ってくる」

僕の嘘を真に受けて島田さんは席を立つ、よし、これで犠牲者は一  
人減った。

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

「全くだね」

島田さんを見送りながら僕達は朗らかに会話する。

でも裏では誰が残りを食べるかで揉めていた。

（明久、今度はお前がいけ！）

（む、無理だよ 僕だったらきつと死んじゃう！）

（流石にワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る……………）

（僕もまだ死にたくは……）

（雄二がいきなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）

（えゝ？そうかなあ？）

（そうかのう？姫路は明久に食べてもらいたそうじゃが）

（そんなことないよ！乙女心をわかってないね！）

（いや、わかってないのはどちらかと言うとお前のことだトーー）

（ええい！往生際が悪い！）

いつまでも決まらないのに業をにやしたか明久は適当な方向を指差し叫ぶ、

「あつ！姫路さん、アレはなんだ！？」

「えっ？なんですか？」

明久の指した方向を素直に見る姫路さん、その隙に明久は雄二の口にお弁当を押し込む。

（おらあつー！）

（もごああつー！）

目を白黒させる雄二の顎を掴んで咀嚼させるのを手伝う明久、そして

「ふう、これでよし」

「酷い・・・・・・・・酷すぎるよ明久・・・・・・・・」

「・・・・・・・・お主、存外鬼畜じゃな」

雄二は激しく震えている、ていうか本当に命の危機なんじゃ・・・・・・・・。

「ごめん、見間違いだったよ」

「あ、そうですか」

全てが終わり明久は朗らかに姫路さんに話しかける、でもあんな手にひっかかる姫路さんが少し心配だったり。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

「堪能したよ、ありがとう」

雄二のおかげでお弁当はなくなり皆穏やかな気持ちになっている。

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん、特に雄二が『美味しい美味しい』って凄い勢いで」

明久の言葉に倒れ伏している雄二も力無く頷く、姫路さんの為にも僕達はこの嘘をつき続けなければいけない。

「……でもまた作ってきたらどうしよう……」

「そうですか！嬉しいですっ」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二？」

明久が雄二に話をふる、さっき頷いてたし意識はある筈だけど。

「う……う……う……。あ、ありがとうな、姫路……」

虫の息とは今の雄二みたいな人の事を言うのだろうか。

「あ、美味しいで思い出したけど駅前に新しい喫茶店が出来たんだって」

『また、作ってきます』なんて事を姫路さんが言い出す前に話題をかえる。

「ああ、あの店じゃな。確かに評判が良いな」

「え？そんなお店があるんですか？」

「うん。今度今日のお礼に雄二がおごってくれるってさ」

「てめ、勝手なこと言っただけ」

どうやら上手くいったらしい、合いの手を入れてくれた明久達にも

感謝感謝。

「あ、そうでした」

ポンと手を打つ姫路さん、何か嫌な予感がする。

「ん？どうしたの？」

「実はですねー」

鞆を探っている、まさかまだ何かあるんじゃない？。。。。。

「デザートもあるんです」

「ああっ！姫路さんアレはなんだ！？」

「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」

また自分が犠牲になると判断した雄二が声を上げた。

僕達はまた小声で話しはじめる。

（明久！俺を殺す気か！？）

（仕方ないんだよ！こんな任務は雄二にしかできない！ここは任せだぜっ）

（馬鹿を言うな そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできないのはできん！）

（この意気地無しっ！）

（そこまで言うならお前にやらせてやる！）

（二人とも喧嘩はやめてよ！姫路さんにばれちゃうよ！）

（む、そうだな、悪かった）

（ごめん！だけど誰が食べるのさ！？）

（………ワシがー！）

（待つて秀吉、僕が止めたんだ、僕が逝くよ）

（真琴！？駄目だ、死ぬよ！）

（俺のことは率先して犠牲にしたよな！？）

（それに真琴、字が違つとる）

まあ、死にはしないだろうな………多分ね

「どうかしましたか？」

「あ、いや！なんでもない！」

「あ、もしかして………」

急に顔を曇らせる姫路さん、まさか、ばれた？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ」

容器に入っているのは、フルーツのヨーグルト和え（のように見えるもの）だ、箸では食べづらい。

「取ってきますね」

立ち上がり教室へと向かう姫路さん、始末するなら今しかない。

「じゃ……………食べるね」

気持ちを落ち着かせて容器を手にする。

「……………すまん。恩に着る」

「ごめん。ありがとう」

「こんな役を負わせて、すまんの」

申し訳なさそうに俯く明久達に笑いかける。

「大丈夫だよ、流石に死にはしないだろうから」

「そ、それもそうだね!」

「ああ 真琴、頼んだぞ!」

「真琴、頼むぞい!」

「うんわかった、それじゃ、いただきます」

皆から見守られながら容器を傾け一気にかきこむ、その瞬間。味とも刺激でも取れる感覚が僕の全てを支配した。

「そついえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

忘れられない昼食を終えて皆でお茶を飲んでいる。

結局島田さんはお茶しか口に入れてない、島田さんは憤慨しているけど食べない方が良かったのは間違いない。

「相手はBクラスなの？」

「ああ、そうだ」

今日の朝、雄二からDクラスの設備を取らない代わりにDクラスにBクラスのエアコン室外機を壊して貰うと発表があった。

この発表から次の相手はBクラスだということがわかったのだ。

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

島田さんの疑問は尤もだ。

あくまで目標のAクラスではなく、全く関係のないBクラスを相手にする必要が感じられない。

「正直に言おう」

雄二が神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

まさか雄二の口から降伏宣言が出るとは思わなかった。

しかし、それも仕方ないA〜Fのクラスで成り立つ文月学園、その最高クラスであるAクラスは我等Fクラスにとっては雲の上の存在なのだ。

いや、五十人のAクラス生徒の殆どはこれから戦うBクラスに毛が生えたような普通の生徒だ。

だが問題はAクラスの中でのトップクラスの生徒達だ、代表の霧島翔子を筆頭に全員が僕等のエース姫路さん並の化け物揃い、

はつきり言って霧島さん一人にFクラス全員で戦っても敗北は必至だろう。

代表を討ち取るのが試召戦争の勝利条件なのだから倒せない以上Fクラスに勝ちはない。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

Bクラスにしても一般の学校の中では最上級の設備を持っている、皆も不満はないだろう。

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

島田さんの台詞に明久が割って入る。姫路さんの為に試召戦争をしている明久にとってはAクラスに勝てるかどうかは重大な問題なんだろう。

「クラス単体では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「一騎打ちに？どうやって？」

「Bクラスを使う」

Bクラスを使ってどうやってAクラスと一騎打ちするつもりだろう？

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

唐突に雄二が明久に問い掛ける。

「え？も、もちろん！」

明久……絶対知らないな、ん？姫路さんが明久に耳打ちをしてる、設備がどうなるか教えているのかな。

「設備のランクを落とされるんだよ」

つまりAクラスとBクラスが戦争してBクラスが負けたなら、Bクラスの設備はCクラスと一緒にになるのだ。

「……まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

雄二はどこか釈然としない表情だ。

「そうだね。常識だね」

知らなかったくせに。調子がいいんだから。

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「明久、本気で言ってるなら殴るよ？」

「それよりも。ムッツリーニ、ペンチ」

「ややっ。僕を爪切り要らずの身体にする動きがっ」

確かに悔しいだろうけどね、それじゃ負けた場合のペナルティーにならないよ。

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

姫路さんがもう一度明久をフォローする。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどねー」

二番目に強いクラスとの戦争直後にまた戦争、これはきつい筈だ。

勿論Fクラスも連戦になるが体力バカ達の集まりとも言えるクラスだし確固たる目標がある今、疲れなんてどうてっことはない。

しかもAクラスは最高クラス故に戦っても得るものがない、反対に僕らFクラスは勝って得るものがあっても、負けて失うものなんかなにもない。

Aクラスは戦う為の目標がなくFクラスとの戦争はただただ疲れるだけの意味がないもの。

この時点でAクラスのやる気はゼロだろう。

戦いにはモチベーションも大事なのだ。

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実にあるのは確かじゃからな。それにー」

「それに？」

「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？こちらに姫路がいるということとは既に知れ渡っていることじゃろう？」

確かにDクラスに勝ったことで僕達に注目が集まった、となると普段から有名な姫路さんがFクラスにいるということは既に全クラスに知られているだろう。

何らかの対策を打たれる事は間違いない、それを秀吉は心配しているのか。

僕らの心配とは裏腹に自信に満ちた表情の雄二。

「とにかくBクラスをやるぞ、細かいことはその後に教えてやる」

「考えがあるならもうなにも言わないよ」

勝算があるならそれに従うだけだ。

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったなら、Bクラスに行って宣戦布告をしてこい」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

確かに昨日痛い目にあつたもんね、

「なら明久、ジャンケンで決めない？」

ここで割って入る、戦いに参加したくないのならどこかで働かなきゃ駄目だって事も教えたいし。

「え？ジャンケン？」

「そう、明久が勝つたら僕が宣戦布告に行くよ、だけど明久、負けたら君が行くんだ」

明久は少し思案して頷いた。

「OK。乗った」

「よし、じゃいくよ」

「ちょっと待て」

今まさにやろうとしたら雄二が横槍を入れる。

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいこう」

心理戦か、面白いかも。

「わかった、それなら僕はグーを出すよ」

先に明久が何を出すか告げる、じゃあ、

「そう？じゃあ僕はパ」お前がグーを出さなかったらブチ殺す」つて雄二！何勝手に・・・・・・・・まあいいか」

雄二が決めたが問題は無い。

「ちよっ・・・・・・・・何その心理戦！？」

「いくよ、ジャンケン」

「わああっ！」

パー（僕）、グー（明久）

「決まりだ。行ってこい」

雄二が断定する。

「絶対に嫌だ！」

明久が納得していないようだ、まあ当たり前か、普通の心理戦じゃないし。

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

「それなら大丈夫だ。保証する」

真っ直ぐな目で明久を見る雄二、でも一度明久は騙されてるから警戒している、どうやって行かせるのだろう。

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしい」

「そっか。それなら大丈夫だねっ」

変わり身早っ！っていうか美少年って……………。

「でも、お前不細工だしな……………」

雄二が溜息混じりに呟く、

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「5度つてこれくらいかな？」

「三人なんて嫌いだっ」

一年の365日と360度を間違えるなんて流石明久だ。

「とにかく頼んだぞ」

拗ねて後ろを向いた明久に雄二が声をかけて昼食はお開きになった。

さてと、午後テストを頑張りますか。

「・・・・・・・・言い訳を聞こうか」

午後のテストも終わった放課後。

明久はBクラスの生徒の暴行によってボロボロになっていた、生傷も結構あったので予め用意していた包帯やら何やらで明久を治療している。

治療もあらかた終わり明久は雄二に詰め寄った。

「予想通りだ」

「くきいー！殺す！殺し切るーっ！」

「落ち着け」

「ぐふあっ！」

暴れる明久の鳩尾を殴り無理矢理黙らせる雄二、うわあ、痛そう。

「先に帰ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」

爽やかに言い残して雄二は教室から出て行った。

「うう………腹が………」

「ごめんね、大丈夫？」

「うん………大丈夫だよ」

動けない明久に肩を貸す、

「ま、真琴、ありがとう」

「いや、半分僕のせいだしね」

殆ど生徒がいなくなった教室でそんな会話をしながら歩く。ふと目の端に姫路さんがキヨロキヨロと挙動不審に辺りをみまわしてるのを捕らえた。

多分昨日書いていた手紙の置場を考えているのだろう。

「明久、行こう」

「う、うん」

これ以上は明久に見せてはいけないと思い。僕は明久と一緒に教室を出た。

## 第5話 戦争の合間（後書き）

お読み下さりありがとうございました！

宜しければ評価、感想の方よろしく願います。

## 第6話 開戦！Bクラス（前書き）

久しぶりの投稿ですがかなりの駄文です。

間をあけて申し訳ありませんでした。

## 第6話 開戦！Bクラス

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路 瑞希の答え

『 $C_6H_6$ 』

教師のコメント

簡単でしたね。

土屋 康太の答え

『ベン+ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめてませんか。

吉井 明久の答え

『 $B - C - N - Z - E - N$ 』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように

沢渡 真琴の答え

『ベンZEN』

教師のコメント

君も職員室へ来なさい。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

雄二が教卓に手をつきながら皆を見据えている。

何か言っているようだけどかなり遠くから聞こえてくるようで上手く聞き取れない。

今日も午前中にテストがあり、さっきやっと全科目のテストを終えて昼ご飯を食べたところだ。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ!』

かろうじて聞こえた皆の雄叫び。あと少しで開戦だな……………。

・・・・・・・・ろ！

・・・こと・・・きる！

「真琴！起きろ！」

あれ？寝てた？

「・・・・・・・・おはよ、雄二」

「こんな時に寝るとは、いい度胸してんな」

頭をかきながら周りを見ると教室内には十人くらいしかいないのがわかった。

「えーっと・・・・・・・・もしかして試召戦争始まつてるの？」

「ああ、もう皆渡り廊下に行ったぞ。お前も早く行け！」

「ふぁーい、行つてきまふ」

あくび混じりに答えて。僕は教室を後にした。

遠くにFクラスとBクラスが対峙しているのが見えた、まだ召喚獣は出していないのを見るとそんなに遅れたわけじゃないらしい。

眠気覚ましも兼ねて走っていると目の前に姫路さんの後ろ姿が見え

た、僕は走る速度を上げて姫路さんの隣に並ぶ。

「姫路さん、置いてかれたの？」

「さ、沢渡君！？何で後ろから？」

「ふあゝあ、居眠りしちゃってさ、じゃ、先に行くね」

「えっ、は、はい」

姫路さんを追い越して僕は戦場へと向かう。

戦場につくと既に戦いは始まっていた。Bクラスの点数はまさに圧倒的だった十人だけの部隊でFクラスと渡り合ってる。

「ふあ、秀吉、明久、遅れてごめん」

「真琴！謝るのは後じゃ！」

「そつだよ！あくびなんかしないで早く手伝って！」

秀吉と明久はかなり焦っている、当たり前だ、相手が強すぎる。

「Fクラスが一人増えたところで、どうってことないんだよ！」

Bクラスの生徒の一人が嘲るようにいう、僕はその生徒に向かって声を上げた。

「なら試してみなよ、試験召喚」

「ハッ上等だ。いくぜ！試験召喚！」

僕とBクラス生徒の足元に魔法陣が現れる、そして現れる迷彩服をきた僕の召喚獣。

『Fクラス 沢渡 真琴 数学 145点  
VS

Bクラス 徳川 清太 152点』

『な、なに！？』

その場にいた全生徒に衝撃が走る、そりゃそうだFクラスの僕がBクラス並の点数をとっているんだから。

「お、お前！Fクラスのくせになんだその点数は！」

驚くBクラスの徳川君を無視して僕は召喚獣にトンファーを回転させながら突っ込ませる、

「ごめん、今は早く決着をつけたいんだ……ふああ」

遠心力を加えた（召喚獣には擬似的な物理法則が働いているのだ）一撃を受けた徳川君の召喚獣は大きく吹き飛んだ、

徳川君の召喚獣はふらふらになりながらも立ち上がる、だが吹き飛んだ先にはFクラスの集団が待っている。

「獲物だ！」

「殺せー！！！」

殆どリンチ状態の徳川君の召喚獣、点数があつという間に0になった。

「ウェルカム！」

「嫌だ！補習はいやだーっ！」

鉄人に連れて行かれる徳川君に手を合わせ戦場に向き直る、

一人は減ったけどまだ実力差がありすぎる、とりあえずDクラス戦のようにお互いがフオローしあいながら戦っていくしかない。

人数で勝も実力で負けているFクラスと実力は上だけど人数が少ないBクラス、しだいに渡り廊下の戦いは膠着状態の様相を呈してきた。

先の徳川君との戦いで僕は優先的に倒さなければならぬ敵としてマークされたく攻撃を受ける。

徳川君の時は驚いている隙に一撃で倒すことが出来たけど今はちがう、相手の召喚獣の動きについていけず集中力が削がれてきた。

「ふあ、ちょっと、まずいかな？」

思わず弱気な事を呟いてしまう。

「来たぞ！姫路 瑞希だ！」

そんな中Bクラスの誰かが叫んだ、姫路さんがまだ来ていないのはわかっていたらしい。

姫路さんが現れたと聞いたBクラス生徒の目の色が変わった、やはり警戒されているな。

明久が姫路さんに話しかけるとトタトタと戦場に入ってくる。

「長谷川先生、Bクラス岩下 律子です。Fクラス姫路 瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路 瑞希です。よろしくお願いします」

やはり早く倒しておきたいのだろつ、Bクラスの生徒が姫路さんに早速勝負を申し込んでいる。

「律子、私も手伝う！」

Bクラス生徒がもう一人召喚する、九人のうち二人もいくなんで、かなり警戒しているのか。

『試験召喚！』

声とともに魔法陣が現れ召喚獣が顕れる。

姫路さんの召喚獣は前に見たものと同じ姿、Bクラス生徒の召喚獣は剣と槍をそれぞれ装備していた。

いや、姫路さんの召喚獣は前と違う所がある、それは、

「あれ？姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

「？結構解けると、アクセサリーをしてるの？」

そう、明久の指摘通り姫路さんの召喚獣は左手に綺麗な腕輪をしていたのだ。

「そ、それって！？」

「私たちが勝てるわけじゃない！」

Bクラス女子の二人が焦りだす、それはそうだ。腕輪をしているということは――

「じゃ、いきますね」

姫路さんの言葉とともに姫路さんの召喚獣が左手を相手にむけた。

「ちょっと待ってよ！？」

「律子 とにかく避けないと！？」

大きく横に跳ぶ相手の召喚獣。その直後姫路さんの召喚獣がビームと思わしき光を腕輪から放った。

「きゃあああーっ！」

「り、律子！」

チームが相手の召喚獣のうちの一体当たりその召喚獣を焼き尽くした。

『Fクラス 姫路 瑞希 数学 412点  
VS

Bクラス 岩下 律子 189点&菊入 真由美 151点』

腕輪を持っている召喚獣は特殊能力が使えるようになる、腕輪を持っているのは一定以上の点数が必要だけどその必要点数は忘れてしまった、どの道僕には縁もなにもない話だし。

「ご、ごめんなさい。これも勝負ですのっ」

攻撃を避けたせいでバランスを崩している相手に接近して剣を振るう姫路さんの召喚獣、相手の召喚獣を一刀両断しあっさりと決着がつく。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ！そんな馬鹿な！？」

「姫路 瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

西村先生が三人を引き連れて補習室へ向かう、これでBクラスの戦力は大幅に下がっただろう。

「み、皆さん、頑張ってください！」

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ!」

姫路さんの指示（激励と言った方が正しい）により僕らの士気は急上昇していく。

「真琴！後は俺に任せとけ!」

「お前だけにいい格好はさせねえ!」

「いくぜ！いくぜ！いくぜー!」

テンションが最高潮に達した仲間達が助けに来てくれる、

「中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死だけはするな!」

Bクラスは後退を開始する、僕と戦っていた生徒も同様に後退し何とか僕は生き延び事ができた。

「良かったよ、ふあゝあ」

まずい、そろそろ限界かも……………

「真琴!」

「うひゃあ!あ、明久か 驚かさないでよ!」

「あ、ごめん」

「あゝ、びっくりした、それで、何かあったの?」

「一旦教室に戻ろって秀吉が」

戻る？まさか教室でなにかあったのかな？

「うむ、明久にはもう言ったがBクラスの代表は根本 恭二らしいのじゃ」

「え？根本君なの？」

「そうじゃ」

成る程、確かにあの根本君が向こうの代表がなら用心したほうがいい、彼は勝利の為なら何でもする男だからなあ。

「うん、わかったーふあー」

「ちょっと、真琴、どうしたの、変だよ、あの点数も」

「うむ、目の下にも隈があるしのう」

「ごめん、ごめん昨日夜遅くまで勉強しててさ、所謂一夜漬けてやつだよーふあーあーあ」

あ、今日一番の大あくびだ。

「一夜漬けであの点数になるものなの……？」

「無茶するのう」

明久と秀吉が呆れたような視線を向けてくる、流石に無茶だったな、  
今ありえないくらい眠いし。

「とりあえず戻ろう」

「うむ、大丈夫だと思うがの」

「そうだねーふあ」

明久が姫路さんに一言報告し教室へと引き返した。

「………うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「何もここまでしなくても………」

教室に引き返した僕らの目の前には穴だらけになった卓袱台とへし  
折られたシャーペンや消しゴムがあった。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響が出る嫌がらせじゃな」

明久と秀吉の感想通りこれではテストが受けられない。

これは困った。

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

「雄二がそう言うなら良いけど」

雄二と明久の会話、何かおかしい気がする。

「雄二、何でこの状況になっていたのを知らなかったの？」

昼休みにはこんな状態になってなかったから戦争が始まってから今までの間にされた筈だ。

ならば雄二や残っていた仲間が気付かないわけではないと思うけど・・・

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続き齒明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだほうがウチとしては有利なんじゃないの？」

「姫路以外は、な」

そうだった、お世辞にも姫路さんは体力があるとは言えない。

「あいつらを教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる」

つまり姫路さんが根本君に止めを刺すってことかな。

「だから受けたの？姫路さんが万全の態勢で勝負できるように」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

雄二の説明を聞いて違和感を覚える、卑怯で有名な根本君がこちらにとって都合が良い条件で協定を結ぶだろうか？

何かがひっかかる。

「明久、真琴。とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうでも何

かされているかもしれん」

そう言うと、秀吉は教室を出て行った。

「ん。雄二、あとよろしく」

「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

「頼んだよ、ふあゝ」

手を挙げる雄二を教室に残し僕達は秀吉を追いかける。

軽目に走っていたみたいで直ぐに追いついた。

「なんか、まだまだ色々やって来そうだね」

「そうじゃな。この程度で終わると思えん。気を引き締めた方が良さそうじゃ」

「そうだね、気をつけようか」

どんな手で来るのだろう。戦力差も厳しいから出来るだけ策では勝ちたい所だ。

戦場が見えてきた。

「二人とも。くれぐれも用心するんじゃないぞ！」

「わかってるよ」

「秀吉もね！」

お互いに警告して別れる。

「吉井、沢渡！戻ってきたか！」

須川君が迎えてくれる、副隊長の島田さんの姿が見えないけどどうかしたのかな？

「待たせたね！戦況は？」

「かなりマズいことになっている」

「えっ？なんで？」

思わず聞き返す。Bクラス本隊が出て来てる訳じゃないだし、負ける筈ないんだけど、どうして？

「島田が人質にとられた」

「なっ！？」

明久が驚きの声をあげる。

人質って……悪役の常套手段じゃないか。

「おかげで相手は残り二人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」

「……………そうだね。とりあえず状況を見たい」

「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

須川君の説明を聞いた明久の判断で僕達は部隊の先頭に出た。

「「島田さん！」」

部隊の先頭に出ると、須川君の説明通りBクラス生徒に捕まった島田さんと島田さんの召喚獣の姿があった。

「よ、吉井！」

なんか映画みたいだな、そして島田さん、僕は無視なの？

「そこで止まれ それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

島田さんを捕らえたBクラス生徒の片方が僕らを牽制する。

確かに人質を見殺しにしたらこちらの士気は下がるだろうな、うまいやり方だな。

明久はどんな指示を「総員突撃用意いーっ！」

ええーっーっ

「明久、それでいいの？」

「ごめんね真琴、でも仕方ないんだ！」

まさか、堂々と見捨てるとは思わなかった……………。

「ま、待て、吉井！」

敵も僕と同じような事を思ったらしく慌てて待ったをかける。

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」

そつえば何故だろう。

「馬鹿だから」

「殺すわよ」

間髪を入れずにBクラス生徒に答えた明久に島田さんが睨みをきかせる、明久が怯えているけど今のは明久が悪いと思う。

「コイツ、お前が怪我を下って偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

島田さんらしい理由だ、やっぱり明久の事が心配なんだろうな。

「島田さん……………」

「な、なによ」

明久の顔は強張っている、何か勘違いしてなきゃいいけど……………。

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

「違うわよ」

ああ、やっぱりか。

「ウチがあんたの様子を見に行っちゃ悪いっての！？それでも心配したんだからね！」

顔を赤くしながら告白する（なんか誤解を招きそうだな）島田さん、でも――

「島田さん、それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

「へっ。やっとわかったか。それじゃ。おとなしく」

「総員突撃いーっ！」

「どうしてよっ！？」

「あの島田さんは偽物だ！変装している敵だぞ！」

――逆効果だと思っんだ……………。

自分を見舞に来るような優しさなんか島田さんにはないって明久は思っているからね。

「おい待てって！コイツ本当に本物の島田だって！」

狼狽するBクラスの生徒、島田さんも愕然とした表情だ、まあ当たり前か目の前で偽物宣言されたわけだし。

「ちょっと沢渡！そんな哀れむような視線をウチに向けるくらいなら吉井を説得しなさいよ！」

あ、いつの間にかそんな視線を島田さんに送っていたらしい、けど。

「ごめんね島田さん、弁護の言葉が見付からないっ……………」

「ちょっと！」

半分は自業自得だしね。

「Bクラスの奴らと偽物を倒すぞ！」

「だから本当に——」

『Bクラス 鈴木 二郎

英語W 33点

VS

Fクラス 田中 明

65点』

『Bクラス 吉田 卓夫

英語W 18点

VS

Fクラス 須川 亮

Bクラスの生徒を呆気なく倒し全員が島田さんに武器を向ける。

「皆、気をつけろ！変装を解いて襲い掛かってくるぞ！」

「よ、吉井、酷い……………。うち、本当に心配したのに……………」

「まだ白々しい演技を続けるか！この大根役者め！」

どうしようこのままじゃ明久が……………死ぬ。

「本当だよ！本当に心配したんだから！」

「取り囲むんだ。いくらBクラスでも、この人数なら勝てるから」

「本当に、『吉井が瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから！」

「包囲中止！これ本物の島田さんだ！」

……………もう何も言うまい、ていうか島田さんそんな嘘に釣られないでよ、まあ明久なら有り得るかもだけどさ。

「島田さん、大丈夫だった？」

床に座り込む島田さんに明久が手を差し延べる。

「・・・・・・・・・・」

明久の手を素直に掴み立ち上がる島田さん、これはかなり怒っているな。

「無事で良かったよ。心配したんだからね」

「・・・・・・・・・・」

「教室に戻って休憩するといいよ。疲れているでしょう？」

「・・・・・・・・・・」

「それにしても、卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」

「・・・・・・・・・・」

明久が話し掛けるが島田さんはなんの反応も示さない。

「あー、島田さん。実はね」

「・・・・・・・・・・なによ」

島田さんがやっと明久に返事をする、明久は最高の笑顔を浮かべた

「僕、本物の島田さんだって最初から気付いてたんだよ？」

「駄目だ！明久！島田さんこれ以上無いってくらい怒ってる！」

わざわざ導火線に火を点けるような明久の発言に眠気が吹っ飛んだ、

「解つてて無視した沢渡！あんたも同罪よ！」

「つて僕も！？」

死ぬかと思いました

「・・・・・・・・知らない天井・・・・・・・・じゃないや」

目を覚ますと教室の天井が目に入った、どうやら畳の上に寝かされているらしい。

「お、気付いたようじゃな？」

すぐ近くから秀吉の声が聞こえてくる、身を起こすと秀吉が呆れた表情でこちらを見ていた、隣には明久が寝ていて姫路さんが明久の近くに座っている。

「……………ここはどこ？」

「あ、気が付きましたか？」

明久も目を覚ましたみたいだ、けどなんで気絶なんかしていたんだっけ？

「心配しましたよ？吉井君も沢渡君もまるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下にたたき付けられたような怪我をして倒れているんですから」

そうだった、姫路さんの想像と全く同じ攻撃を島田さんから受けたんだった。

それにしてもよく分かったな姫路さん。

「いくら試召『戦争』じゃからといって、本当に怪我をする必要はないんじゃないぞ？」

「ちょっと色々あってね。それで試召戦争はどうなったの？」

やられた所が痛むのか明久が顔をしかめながら状況を聞く、僕はそんなに痛くないから明久に比べて、まだ手加減はされていたらしい。

「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況は？」

「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もつとも、こちらの被害も少なくはないがな」

こちらの被害が書いてあるだろうメモを見ながら雄二が答える、確かにあの点数差だと仕方ないか。

「色々あったけど、今の所は上手く運んでいるわけだね…………ふあゝ」

やばいまだ眠い、

「まあな」

相手は根本君だ、まだ気は抜けない。

「……………(トントン)」

「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあったか？」

いつの間にか諜報係の康太が近くに来ていた。

「ん？Cクラスの様子が怪しいだど？」

「……………(コクリ)」

康太の情報によると、Cクラスが試召戦争の準備をしているみたいだ、でもAクラスと戦おうなんて考えるわけないか、だとすると、

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

雄二の言うとおりこの戦争に勝った方と戦う気だろう。

「雄二、どうするの？」

「んー、そうだな」

時計の針は四時半を刺している、Cクラスの代表が校内に残っている可能性は高い。

うん？四時半？

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言っただけでやれば俺達に攻め込む気もなくなるだろ」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

確かに明久の言う通りCクラスは僕らがBクラスに勝つなんて思ってもいないだろう。

「よし。それじゃ今から行ってくるか」

「そうだね」

明久、雄二と一緒に立ち上がる。

「秀吉は念のためここに残ってくれ」

「ん？なんじゃ？ワシは行かなくてよいのか？」

「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな」

「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

素直に従った秀吉。念の為か、何も無ければいいけど。

「じゃ、行こうか。ちょっと人数少なくて不安だけど」

秀吉を除いた明久、雄二、姫路さん、康太、僕のメンバーでCクラスに行く。

「吉井、沢渡、アンタらの返り血こびりついて洗うの大変だったんだけど。どうしてくれんのよ」

「それって二人が悪いのか？」

廊下に出ると島田さんと須川君に出くわした。

「島田さん、須川君いいところに、Cクラスまで一緒に来てくれな  
いかな？」

さつきから嫌な予感がする、何かあった時の戦力はあった方が良さ  
と思って二人に声を掛けてみた。

「んー、別にいいけど？」

「ああ。俺も大丈夫だ」

よし！心強い仲間をゲット。

「急がんとCクラスの代表が帰ってしまうぞい」

「そうだね、急ごう」

島田さんと須川君を足した七人でCクラスに向かうことになった。

その途中に僕は雄二の隣に並ぶ。

「ねえ雄二」

「何だ？真琴」

雄二は顔は前をむいたまま答えた。

「Cクラス、気をつけた方がよいよ……ふあゝ」

「言われなくても分かってる、ってか真琴、お前大丈夫か？」

間を入れずに応える雄二、僕は問いには答えなくて黙り込んだ。

……ヤバイ、限界かも。

「Fクラス代表の坂本 雄二だ、このクラスの代表は？」

教室の扉を開け放ち。雄二が声を上げる。

やはり試召戦争の準備をしていたのだろうか、中にはかなりの人数が残っていた。

「私だけど、何か用かしら？」

そう言って出てきたのは黒髪ショートの子、バレー部所属の小山さんだ。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふうん……………」

雄二の言葉を聞いた小山さんはニヤつくような笑みを浮かべていた。

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……………。どうしようかしらね、根本くん？」

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

そう言いながら現れたのは黒髪を短く刈ったヒゲ面の男子、Bクラス代表の根本 恭二だった。

「なっ！？根本君！Bクラスの君がどうしてこんなところに！」

明久が驚き大声を出す、島田さんも須川君も声こそ出さないものの明久と同じように驚いている。

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

「何を言ってるー」

「先に協定破ったのはソッチだからな？これはお互い様、だよな！」

根本君が告げると同時に取り巻き共が動き出した。

取り巻き共の背後には数学の長谷川先生が隠されている。

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚をー」

「させるか！Fクラス須川が受け立つ！試験召喚！」

Bクラスによる雄二への攻撃を須川君が妨害する。

「僕らは協定違反なんてしていない！これはCクラスとFクラスのー」

「駄目だよ明久！Bクラスと結んだ条約は『試召戦争に関する一切の行為の禁止』なんだ！それを盾にしらを切られたら反論出来ない！」

弁解しようとする明久を下がらせる。

「へ理屈だ！」

「へ理屈も立派な理屈の内ってな」

「明久、ここは逃げるぞ！」

「くそっ！」

勝ち目の無い戦いに挑んでいる須川君に背を向けて僕達はCクラスから逃げ出した。

「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

根本君の指示とたくさんの足音が聞こえる。

この状況はかなりマズイ、僕達じゃBクラスとは渡り合えないし姫路さんも消耗している、流石にBクラス代表だ、頭が切れる。

「はあ、ふう………」

「姫路、大丈夫か？」

逃げる僕らの中で姫路さんが遅れだす、身体が弱い姫路さんにはこの逃走は厳しいらしい。

「あ、あの、さ、先………に行つて、ください………」

息も絶え絶えに姫路さんが言う。けどこのままでは必ず追い付かれる、点数も体力も消耗した状態ではいかに姫路さんでも敗北は必至だろう。

こうなったら。

「ゆ「雄二!」」

「なんだ明久!」

「ここは僕が引き受ける!雄二は姫路さんを連れて逃げてくれ!」

言おうとしたことを先に明久に言われてしまった、

「よ、吉井君、私のことは、気に、しないで」

「・・・・・・・・わかった。ここはお前に任せる」

姫路さんの言葉を遮り雄二が応えた、明久は立ち止まり振り返る。

「・・・・・・・・・・(ピタッ)」

「いや、ムツツリーニも逃げて欲しい。多分明日はムツツリーニが戦争の鍵を握るから」

明久は一緒に立ち止まった康太に言う、確かに康太には明日重大な役割があるからね。

「僕は残るよ、良いよね?」

明日なんの役割も無い僕なら残ってもいいはずだ。

だが明久は首を横に振った。

「・・・・・・・・、いや、もう真琴は召喚してもまともに戦えるとは思えない。一人でも戦死させるわけには行かないんだ」

珍しく正論を言う明久に何の反論も出来ない、

「んじゃ、ウチは残ってもいいのかしら隊長殿？」

「・・・・・・・・頼めるかな？」

「はいはい。お任せあれっと」

笑いながら明久と同じ方向を見る島田さん。

「・・・・・・・・（グッ）」

明久達に親指を立て、康太は走り去る。

「・・・・・・・・明久、島田さん、ごめんなさい」

そして僕も明久達に背を向けFクラスへと走り出す。

走りながら僕は申し訳なさで情けなさでいっぱいだった。

## 第6話 開戦！Bクラス（後書き）

このような駄文を読んで下さり真にありがとうございます。

## 第7話 根本を倒せ！（前書き）

長い間放置していてすいませんでした。

これからは滞らせることもなくしたいと思います。

読んでくれている皆様にご迷惑をおかけした事を深くお詫び申し上げます。

## 第7話 根本を倒せ！

問 以下の問いに答えなさい

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路 瑞希の答え

『good|better|best  
bad|worse|worst』

教師のコメント

その通りです

吉井 明久の答え

『good|gooder|goodest』

教師のコメント

まともな間違えかたで先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は語尾にerやestをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋 康太の答え

『bad|butte|rust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

沢渡 真琴の答え

『b a d l b i t t e r l b e a s t』

教師のコメント

『悪い』『苦い』『獣』

何とか答えようとした気持ちは汲みます

Bクラスに嵌められ窮地に陥った僕らだったけど、須川君と明久、島田さんのおかげで逃げのびることが出来た。

後は三人が無事に帰って来てくれれば良いんだけど……。

「ねえ雄二、明久達大丈夫かな？」

「明久と島田は大丈夫だろう、島田の場合問題の意味さえ解ればBクラス並の点数を取れるからな、明久も伊達に観察処分者って呼ばれている訳じゃない、逃げ回るぐらい朝飯前だ」

雄二が答えるのと殆ど同時に教室のドアが開き明久と島田さんが帰ってきた。

よほど心配していたのか姫路さんが一目散に明久の下に駆け寄る、  
やや遅れて僕らも明久と島田さんの下へ歩いて行く、

「お。戻ったか。お疲れさん」

「無事じゃったようじゃな」

「ん。ただいま」

言葉を交わす明久達を見てほっとする、

「おかえり、二人共無事で何よりだよ……ふあゝあ」

まずい、安心したら眠気が一気に襲ってきた、頭も全然働かないし  
体も重い、徹夜したのは完璧に失敗だったみたいだ。

「さて、お前ら」

「ん？」

教室に残っているメンバーを見回して雄二が口を開いた。

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦とい  
う形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

そりゃそうだ、しかし随分いやらしい手を打ってくる人だな根本君  
って。

「それならどうしようか？このままじゃ勝ってもCクラスの餌食だ

よ？」

「そうじゃな………」

この状況を打破するために頭を悩ます僕達に向かって雄二は彼独特の野性的な笑みを浮かべた、

「心配するな。向こうがそう来るなら、こっちにだって考えがある」

「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

雄二はそれだけ言って皆に帰るように指示を出し今日は解散と相成った。

「ねえ雄二、考えってなんなのさ？」

帰り道、考えとやらを雄二に聞いてみるが、

「明日の朝にでも説明してやるよ」

「……………まあいいけどさ」

やっぱり答えてくれないか。

そのままお互い黙って歩くこと数分、雄二の家に着いた、

「じゃあね雄二、また明日」

「ああ、今日はゆっくり寝ろよ、明日も寝不足でふらふらだったら承知しないからな」

「ぐっ、分かったよ」

確かに明日は正念場だ。Fクラス全員が一丸となって戦わないと勝ちは無いただろう、今日の僕みたいに役立たずでは困るのだが……………。

「徹夜は失敗だったかな……………」

家に帰り一人、部屋のベッドに横たわりぼやいてみる、ぼんやりと天井を眺めているうちに寝不足だったこともあり、いつの間にか僕は寝てしまった。

夢うつつに視線を感じ目を開けると帽子を被った少女が寝ている僕の顔を覗き込んでいた。

「・・・・・・・・やあ、久しぶり」

寝ながら挨拶した僕に向かって少女は満足そうな笑みを浮かべる、

「覚えてるんだ、私と会った事」

少し驚いたように呟く少女、僕はそんな彼女から目を離し辺りを見回していた。

「まさか・・・・・・・・僕、また死んだの!？」

ここに来た意味に思い辺り狼狽する、まだ死にたくないよ！

「あ、大丈夫、今君は精神だけこっちに来ているんだよ、いわゆる幽体離脱ってやつだね」

僕の狼狽っぷりに若干引きつつ宥めるように説明してくれた、よかった、生きてるんだ。

「びつくりさせてごめんね、君に用事があって呼んだんだ」

「用事？」

少女は頷きポケットから一枚のカードを取り出す、

「これは覚えてる？」

カード……えーつと、

「ごめん、何だっけそれ」

全く思い出せない、あんなの貰ったっけ？

「やっぱり忘れてるか、まあ君にしたら十年以上前の事だもんね、ま、忘れてるならもう一度受け取りなさい」

苦笑を浮かべながら唐突にカードを僕に向かって投げる少女、反射的に受け取るとカードは僕の掌の中に吸い込まれるように消えて行った。

「そのカードは君みたいに前世の記憶を持っている人達への贈り物。自分の力だけじゃどうしようもない時にそのカードを頭の中に思い描いて、必ず君の助けになってくれるから」

掌を凝視している僕を尻目に少女は話を続ける、

「用事は終わり、そろそろ起きた方がいいんじゃない？」

少女の言葉を耳にしながらも僕の意識は薄れていく、

「じゃ、また会いましょうね」

軽やかに手を振る彼女の姿を最後に僕の意識は闇に落ちた。

ベットから身を起こすと時計が目に入った、時刻は午前4時を少し過ぎた辺りだ、

「睡眠時間約12時間か・・・寝過ぎだよね」

僕としては昼寝をするつもりだったけど、どうやら熟睡していたらしい、まだ制服も着たままだ。

制服のままで寝ちゃったせいか汗ばむ身体が気持ち悪い、とりあえずシャワー浴びようか。

・・・

春の日差しの眩しさに目を覚ます、あれ？ さっきのは夢？ いや確かにシャワーを浴びた記憶はある、という事は、

「二度寝したのか、っていうか今何時!？」

慌てて時計を見ると時刻は8時を過ぎていた。

「うわっ！ 遅刻じゃん！」

慌てて家を出るけど走っても到底間に合いそうにない、今日は大切な日だから遅刻はしたくない、

そう思った僕は3軒隣の家に足を向けた。

まだいるかなと不安に思いつつインターホンを鳴らすとすぐにドアが開き西洋系の男の人が顔を出す、体格は良く西村先生と比べても引けをとらない、

「アレ、学校はどうしたマコト」

男の人は体格に似合わず朗らかに話しかけてきた、

「あのさジャン、悪いとは思ってるけどスクーター貸してくれないかな、遅刻しそうなんだよ」

顔の前で両手を合わせて頭を下げる、そんな僕の仕草にジャンは笑い声をあげた、

「ヒサしぶりだね、マコトがボクにバイク借りに来るのハ、分かったヨ、今カギ持ってくるからマッテテ」

ジャンはすぐに鍵を持って来てくれた、

「ハイ、マコト気をつけテネ」

「うん、ありがとう、ジャン」

スクーターのエンジンをかけ、家から持って来た長めのレインコートを羽織ってからヘルメットを被る、

万が一スクーターに乗っているところを見つかれば一発で停学Or退学だから出来る限り身を隠さなきゃならない。

「帰りにかえすからね、じゃ行つて来るよ」

「ウン、マコト安全運転ダヨ」

ジャンにもう一度お礼を言つてスクーターを走らせる、腕時計を見ると近道すれば十分間に合う時間帯だ。

スクーターの進路を路地裏に向ける、去年も何度か通つた道だからどういけば見つからずに行けるか道筋は既に頭の中に入っているしこれなら大丈夫

そう確信した僕は安堵のため息を吐いてハンドルを切った。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

現在8時30分、僕は雄二に突っ込みを入れようかどうか迷っていた。

いや雄二の表情は真剣そのものだ、我等がFクラス代表は本当に今手に持っている物がBクラスとの戦争に必要なだと判断しているのだろつ。

だけど気になるんだ、雄二何処からあんな物を？

「秀吉にコイツを来てもらつ」

雄二………何で君がこの学校の女子制服なんか持っているんだよ！

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

っていうか何で誰も突っ込まないのさ！ それに秀吉！ 少しくらい構った方がいいよ。

「秀吉には木下 優子として、Aクラスの使者を装ってもらつ」

ああ、成る程だから女装か。

木下 優子とは秀吉の双子の姉で性別は違えど顔立ちから体格に至るまでそっくりでまるで一卵性の双子みたいと評判だ。

秀吉が優子さんに変装してCクラスを挑発するのか。

それなら上手くいくかもしれないな。

「と、いうわけで秀吉。準備してくれ」

「う、うむ……………」

制服を受け取った秀吉は着替えを始めた、何か今周りからどよめきが上がったような。

「……………！！（バシャバシャバシャ！）」

康太が物凄い勢いでシャッターを切る音が響く、明久は興奮しているのか顔が赤かった。

「……………（トントン）」

クラスの皆の異常なテンションに若干引いている僕の肩を秀吉を撮っていた筈の康太が叩いた、

「なに、康太？」

康太は僕には答えずに手にした鞆の中から女子制服を取り出した、

「……………（スッ）」

「……………僕もやるの？」

「……………（コクコク）」

ダッ！（僕が逃げ出す音）

ガシッ！（康太が僕を捕まえる音）

「無理だから！ 僕、Aクラスの誰にも似てないよ！？」

必死に逃げ出そうとするがいつの間にかクラスの皆に周りを囲まれていて逃げる事が出来ない、無駄な統率力に思わず舌を巻く。

「・・・・・・・・手はある」

そう言うなり康太は鞆からシークレットシューズとウィッグを取り出す、

「何でそんなに用意周到なの？ 始めから狙っていたとしか思えないよ！」

「何を言ってるんだ真琴、当たり前だろう」

「やっぱり雄二の作戦なんだ！ せめてサプライズじゃなくて前もって教えてよ！」

教壇から僕達を見下ろしてくる雄二をこれでもかと睨みつけるが雄二は気にもとめない、

どう足掻いても僕が女装する事は覆ら無いのか・・・・・・・・それなら

「・・・・・・・・殺るなら早く殺つてよ」

諦めよう。

数分後、女装した僕と秀吉はCクラスを目の前に最後の打ち合わせをしていた。

「さて、ここからはお前達で行ってくれ、頼んだぞ秀吉・真琴」

「気が進まんのう………」

隣でため息をつく秀吉、お姉さんに化けて騙す何てやっぱり嫌なんだ。

「そこを何とか頼む」

「むう………仕方ないのう………」

渋々納得する秀吉を尻目に僕は表情を強張らせていた、

「大丈夫かな？ ばれないかな………」

「真琴………大丈夫だよちゃんと霧島さんに見えるから」

僕は今霧島さんに化けていた、だけど彼女独特の雰囲気やたたくま何かは真似ようとしても出来るもんじゃないと思う。

だから一発ではれやしないかと戦々恐々としているのだ。

「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ。お前ならできるはずだ」

雄二が秀吉に声をかけている、秀吉の演技力だったら大丈夫だろう、でも僕は演技なんて小学校の時に劇でやったごんぎつね以来なのに上手く出来るだろうか？

「真琴、お主はワシの後ろで黙って立っただけで十分じゃ、霧島 翔子はどちらかというが無口な方じゃからな」

安心させるような笑みを浮かべながら僕に言い聞かせる秀吉に頷いて僕はCクラスへと歩み出した。

ガラガラガラ、と秀吉がCクラスの扉を開ける。

「静かになさい、この薄汚い豚ども！」

入るなり大きな声でCクラスの皆さんを罵倒する秀吉、さっきまでとは違い結構乗ってる気がするのは僕だけかな？

「な、何よアンタ！」

昨日あったCクラス代表の小山さんがいきり立つ、そりゃそうか、いきなり豚って呼ばれたんだからなあ。

「話しかけないで！ 豚臭いわ！」

秀吉、自分から入ってきたのに豚臭いってのは無いんじゃない？

「アンタ達Aクラスの木下と霧島ね？　ちよつと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！　何の用よ！」

女装して優子さんと見分けがつかなくなっている秀吉はわかるけど、昨日会った僕の事までわからなくなっているなんてかなり頭にきてるみたいだ。

これなら僕が何かへまをやらかさない限り大丈夫そうだな。

「私はね、こんなに臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！　貴女達なんて豚小屋で充分だわ！」

「なっ！　言うに事欠いて私たちにはFクラスがお似合いですって！？」

小山さん、誰もFクラスのことなんて言っていないんだけど。

「手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの」

演劇魂に火が着いたのか演技と知っている僕にも今喋っているのが秀吉なのか優子さんなのか分からなくなってきた。

高校の演劇部って皆こうなのかな？

「ちよつと試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから！」

ぴしゃりと言い放ち靴の音をわざとたてながら教室を出る秀吉の顔

は心無しかスッキリした表情を浮かべていた。

「これで良かったかのう？」

「ああ。素晴らしい仕事だった」

「良かった、ばれなかった」

「真琴、ご苦労様」

Cクラスから出て来た僕達を雄二と明久が迎えてくれた、

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

小山さんの叫びがCクラスから聞こえてくる、騙したのは悪いかも  
だけど向こうも散々卑怯な手を打ってきたわけだから別に良いよね。

・・・それと木下 優子さん、ごめんなさい。

「作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

雄二の促しで僕らはFクラスに戻ることにした。

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！ 戦線を拡大させるでないぞ」

秀吉の指示が戦場に響き渡る。

午前9時から戦争が再開され今は中断されてたBクラス前の戦闘を開始している。

僕達は雄二からBクラスを教室内に閉じ込めると指示を受けていて、その指示を遂行しようと戦っているのだけど現在の戦況は芳しくない。

Bクラスとの戦力差が大きいつてもあるけどそれは予想の範囲内だ、予想外なのは――

「姫路さん、どうしたんだろ………？」

――姫路さんの様子がおかしい事だ。

彼女は僕達Fクラスの主力であると同時に今回の戦争では雄二から前線の総司令官の役割を任されているのだが何故か動こうとしない。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」

結果、副指令の秀吉が姫路さんの代わりに指示を出している、戦争が始まってから数時間経った今は何とか予定通りに事を運べているようだ。

だけどこの状態がいつまで持つかわからない、現に今僕を含むBクラス左側出入り口の部隊がじりじりと押し戻されているのだから。

「やばいよ！ このままじゃ押し切られる！」

「分かってる！ 今援軍を要請した！」

今この場のフィールドは古典だ、Bクラスには文系が多くだでさえ不利な僕達はさらに追い詰められていた。

まだかろうじて抵抗出来ているけど僕達だけでは押し返す事は無理だろう、ここは姫路さんの力を借りたいけれど、

「……………無理っばいな」

明久が指示をだすも姫路さんは泣きそうな顔でオロオロしているだけだった。

このままじゃ突破されてしまう、そう思った刹那明久が僕達のいる左側出入り口に向かってダッシュしてきた。

そのまま古典の竹中先生の背後に立って何かを耳打ちする明久、す

ると

「少々席を外します！」

そう言って竹中先生は頭……いやカツラを抑えながらどこかへ行ってしまった。

「古典の点数が残っている人は左側の出入り口へ！ 消耗した人は補給に回って！」

竹中先生がカツラを直す若干の間を使い明久が的確な指示を出す、良かった、これで少しは楽になる。

点数を補給していくメンバーと入れ代わりに来た人達と合流し体制を整える。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

状況が悪化した事を知らせる声が僕の耳に入ってくる、このままじやじり貧だ。

「姫路さんさえ動いてくれたら………」

思わず呟いてしまう、姫路さんに頼り過ぎかも知れないけど・・・  
・・・まてよ、

「もしかして根本君が姫路さんに何かしたんじゃない・・・!」

姫路さんという個人戦力に依存しているFクラスにとって彼女が無  
力化される事は即、敗北にも繋がりがねない、逆を言えば相手は姫  
路さんさえ無力化できれば僕達なんかあつという間に倒せるだろう。

「400点オーバーの召喚獣の相手は厳しいけど、ただの女子の姫  
路さんを戦えないようにするのは簡単ってことか」

何しろBクラスの代表は根本君だ卑劣な手段ならおてのものだろう  
から、でもどうやって？

姫路さんは責任感が強い人だ、そんな彼女をあそこまで追い詰める  
ものって何なんだ・・・? ?

「FクラスとBクラスが戦争を始めてからの期間で調達できて姫路  
さんを動けなくする物なんかあるわけ・・・」

「あ・・・!」

姫路さんの声が聞こえ思考に埋没していた頭を声のした方に向ける

と走り去る明久の後ろ姿が見えた。

遠ざかる背中越からヒシヒシと怒りの感情が伝わってくる、根本が姫路さんに何をしたか明久は知ったらしいな。

明久の背中を見送り視線を戦場に戻すと手に持った何かをちらつかせながらニヤつく根本君の姿が目に入る、

「あれは……………何だろ？」

目を凝らし彼の手の中にある物に意識を集中させる。

「……………成る程ね」

見えた、彼が持っているもの

それを確認した瞬間に全身の血が沸騰しそうな程の怒りを感じた。

根本君が持っていた物。

それは三日前の放課後、姫路さんが恥ずかしそうに手にしていた、あの封筒だった。

「姫路さんはあれをネタに脅されていたのか」

勝利の為にはどんな手段も問わない、まさに司令官の鏡だね

賞賛めいた言葉頭の中に浮かんでくる、だけど――

「根本 恭二、君だけは絶対に赦さない・・・・・・・・!!」

呟き明久の後を追うように走り出す。

前方に明久の姿を確認した僕は速度を上げた。

「明久、かなり怒ってる見たいだね、どうしたのさ？」

隣に並び声をかける、明久はちょっと笑いを浮かべて口を開いた、

「そういう真琴も怖い顔してるけれど、どうかしたの？」

明久と僕は顔を見合わせる、

「明久・・・・・・・・」

「うん・・・・・・・・分かってる」

「あの野郎、ブチ殺す！」

「雄二っ！」

「うん？ どうした二人とも。敗走か？ チョキでシバくぞ」

僕達が教室に飛び込むと、ノートに何かを書き込んでいた雄二が顔を上げた。

近いてノートを覗いてみるとFクラスとBクラスの戦力を記したもののらしい。

「話があるんだ」

「………とりあえず、聞こうか」

何時になく真剣な明久の態度に雄二も真面目な顔で向き合う、

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「………お前に何があつたんだ？」

「明久、君、やっぱりバカだろ」

事情も何も知らない雄二にいきなり何を言ってるんだよ、思わず辛辣な突っ込みを入れちゃったじゃないか。

「ああ、いや、その。えーっと………」

しどろもどろになる明久、うん見るからに挙動不審だ。

「雄二、とりあえずそういう事だから黙って受け入れて欲しいんだ

けど……だめ？」

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれぐらいどうにかしてやろう」

即答だよ、拍子抜けするくらい簡単に提案が受け入れられた、『お前らにそういう趣味があったとしても不思議はない』とか思われているのかな。

まあ手早く話しがすんだから良かった事にしようか。

「で、それだけか？」

さっきの真面目な顔とは打って変わった呆れた目で僕達を見据える雄二、当たり前だけどそれだけのはずがない。

「それに、姫路さんを今回の戦闘から外してほしい」

「理由は？」

「理由は言えない」

「どうしても外しないとダメなのか？」

「うん。どうしても」

「絶対に外してくれないかな」  
流石に考え込む雄二。

当たり前だ、Bクラス戦で姫路さんを外すなんて自殺行為もいいとこだ、Fクラス代表としては簡単に容認できる筈もない。

「頼む、雄二！」

「お願いだ！」

明久と一緒に深く頭を下げた。

わざわざリスクを高めるだけの頼みをしておいて、理由は言えない。等と言われたら僕ならば受け入れる事は出来ない、だが、

「……………条件がある」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役割をお前らがやるんだ、どうやってもいい。必ず成功させる」

だが雄二は頼みを聞き入れてくれた、僕とは違い心がひろいな。

「もちろんやってみせる！ 絶対に成功させるさ！」

「任せてよ！」

「良い返事だ」

口を端を上げニヒルな笑みを浮かべる雄二。

「それで、僕達は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかける。科目は何でもいい」

「皆のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ」

「………難しいことを言ってくれね」

明久が呻くように言う。

確かに厄介だ、Bクラスの左右の扉で行われている戦闘は場所の都合上常に小数同士の戦いになっている。雄二が言うには、これは時間を稼ぐ為と作戦に向けた布石らしい、そんな中で扉から離れた位置で指揮をとっている根本に近付くには圧倒的な火力が必要になる。

姫路さんは根本に向かって道を切り開く為の鍵だったのか、確かにそんな役目はFクラスの中でも彼女にしか出来ないな。

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。必ず成功させろ」

強い口調で言い切る雄二、失敗は即敗北に繋がるのか………。  
さてどうしようか？

考え込む僕らを置いて雄二が教室から出て行く、

「それじゃ、うまくやれよ」

「え？　どこか行くの？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

確かBクラスのエアコンの室外機に細工をさせるって言ってたな。

雄二がFクラスの扉に手をかけようとした時勢いよく扉が開き近藤君が駆け込んできた、

「坂本、　右側出入り口が突破されそうだ！　援軍を要請する！」

「何っ！」

近藤君の報告に目を剥く雄二。だが驚いたのは一瞬だけですぐに気を持ち直し僕の方を向いた。

「……………真琴、お前の担当は左側出入り口だったよな？」

「うん」

「よし、お前が援軍に行つてこい、明久が根本に攻撃を仕掛けるまで前線を持たせるんだ」

「……………わかった、やり遂げてみせるよ！」

僕の返事に雄二は満足そうに頷いて廊下側に向いた。

「明久」

そのまま教室を出るのかと思ったら雄二は廊下側を向いたまま明久に声をかける。

「確かにお前は点数は低いが、秀吉やムツリーニのように、お前にも秀でてる部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「………雄二」

「うまくやれ。計画に変更はない」

それだけ言って教室を出て行く雄二、後ろ姿を見送っていた僕に近藤君が声をかけた。

「沢渡、そろそろ行かないとまずいぞ」

「そうだね、行こうか………明久、根本は任せたよ」

明久に声をかけ返事を聞かずに教室からでる、急がなきゃな。

Bクラスの教室が見えてきた、良かったまだ持ちこたえているみた  
いだ。

「援軍が来たぞお！」

近藤君が声を張り上げる、その声を聞いた皆が振り返った。

「真琴か！」

「助かったぜ！」

僕の姿を認めた人達が安堵感を滲ませた歓声を上げる、僕は右側出入り口に辿りつき軽く息を整えた。

「間に合ったみたいだね。点数を消費した人は下がって、ここからは僕が相手をするから」

そう言っつてBクラスを睨みつける。

「いいぜ誰が相手でも、所詮はFクラス、誰が来ても一緒さ」

余裕の余り笑いを浮かべるBクラスの生徒、そんな態度でいられるのも今のうちだ。

「確かにBクラスの力ならあつという間に僕を倒せるかもね。だったら僕も見せてあげるよ、雄二とつるんでいた中学時代、喧嘩ばかりしていたおかげで身についた力を！」

「へっ！ 下らねえな、試験召喚！」

魔法陣が僕とBクラス生徒の足元に展開され召喚獣が姿を表した。

『Fクラス 沢渡 真琴 現代国語 92点  
VS

Bクラス 刈谷 将 142点』

点数が表示された、Bクラスの刈谷君の点数は今まで戦っていたからか予想よりも低い、それでも差が大きい。

「へっ！ 行ぐぜ、阿呆！」

刈谷君の召喚獣が突っ込んで来る、彼にしてみれば必殺の動きだったのだろう、でもその攻撃は外れてしまった、

「ちっ！ 外しちゃったか、運がいいな」

悪態をつきながら攻撃を続ける刈谷君、だけど一発たりとも当たらない。

「何で当たらねえんだ……！」

苛立ちからか声を荒げる刈谷君。

「何時まで避け続けつもりだよ！」

刈谷君の召喚獣の動きが段々とが荒くなってくる。

いつまでも続く戦いに業をにやしたのかさっきよりも勢いをつけて突進してきた。

「いい加減に潰れる！ 雑魚があ！」

凄まじい勢いで繰り出されたその攻撃を僕は紙一重でかわす、

「な、何だと………！」

刈谷君の召喚獣の態勢が大きく崩れた、このチャンス逃がすわけには行かない！

「おりゃあああっ！」

気合いを入れトンファーで殴りまくる、

「くっ！ てめえ、さてはこれを狙ってやがったな………汚ねえぞ！」

しまった、という表情を浮かべた刈谷君が大声を出す、当たり前だ、僕みたいなのがBクラスに勝つには隙を作らせるしかないじゃないか。

「やるじゃねえか、もう油断しねえ……。牧田 井澤、来い！ 3人までなら何とかやれる、一気に蹴散らすぞ！」

「試験召喚！！！」

刈谷君の呼びかけに応え2人加勢される、僕は召喚獣の右のトンフアーを持ち替えさせこん棒にした。

「行くぜ、おらぁ！」

刈谷君の言葉で第二ラウンドが開始された。

以前激しい戦闘が繰り広げられているBクラス前に雄二率いるFクラス本隊が到着したのは作戦開始まであと数分となった辺りだった。

「なんだ、代表まで前線に出て来るなんてな、悪あがきもたいがいにしたらどうだ」

雄二の姿を確認した刈谷君が嘲るような声で言う、

「まだだよ、面白いのはこれから」

「へっ、ボロボロのくせに良く言うぜ」

そついい嘲笑に顔を歪ませる刈谷君達、確かに今までの戦いで僕の召喚獣はボロボロだ、戦いが続いたとしても敗北は濃厚だろう。

けどまだ点数はある、まだ戦える。

「生きてるうちは負けじゃない！」

「減らず口叩いてんじゃねえぞ！」

そして戦闘が再開される、僕は召喚獣を回避に専念させるが戦場が狭さが影響して徐々に追い詰められてしまう。

「死ねや！」

刈谷君の召喚獣が勢いよく振り下ろした獲物をトンファーを交差させ受け止める。

「潰れるお！」

刈谷君の召喚獣はそのまま押し潰そうと力を込める、こうなってしまうと点数の低いこちらが負けてしまう！

「くっ………、駄目か………」

そんな弦きを漏らした時、背後から視線を感じた。

「雄二………」

振り向くと雄二が僕の事をじっと見ていた。

それで思い出した、ついさっき雄二から言われた事を、

「明久が根本に攻撃を仕掛けるまでもたせる……か、やり遂げてみせるって答えたんだ、有言実行ぐらいしなきゃ!」

気合いを入れ直しこの状況を打破するために頭を回転させる。

「何かないか……良い手があるはずなんだ！  
あ……あった一っだけ」

……

一つだけ何とか出来る可能性がある、だけど不確実で卑怯な手だ、使っていないのか？

ふと悩んでいる僕の脳裏を根本のニヤけた顔が掠める。

「……別にいいや、根本だし」

自分に言い聞かせるように呟いてから目を閉じる、意識を集中せると頭の中に朧げに何かが現れる、その何かが一枚のカードの形を成した時右手に固い感触を覚えた。

「えっ・・・・・・・・・・？」

右手を見るとカードが握られていた。

「本当だったんだ・・・・・・・・・・」

無意識のうちに呟いていた僕の見ている前でカードが強烈な光を発する。

「うわっ！」

思わず目をつむる。

光が止み腕にズシリと重さを感じる、恐る恐る目を開けると、僕の目の前に刈谷君の召喚獣が立っていた。

「これって・・・・・・・・・・どういう・・・・・・・・・・」

余りの事に呆然自失になりかている僕の目の前で刈谷君の召喚獣が力を込める、

「考えてる暇は無いか！」

事態の究明を後回しにして僕は腕に入っていた力を緩める、当然このままじゃ押し潰されるだけだから体をずらし力を逃がす。

「召喚獣になっちゃったのかな、それにしても動き易いな」

簡単にだけど自分の状況を確認した。

転げる刈谷君の召喚獣を無視して牧田君の召喚獣の方に走り出す。

「逃がすかあ！」

僕が背を向けている事に気が付いた刈谷君は後ろから召喚獣を突進させた。

頭に血が上った刈谷君は僕の目の前の牧田君の召喚獣が目に入っていないみたいだ。

「当たらないよ！」

音を頼りに刈谷君の召喚獣を当たるギリギリまで引き寄せてから横に飛ぶ。

刈谷君の召喚獣の突進は止まる筈もなく僕の目の前にいた牧田君の召喚獣と激突してしまった。

同じBクラスの全力の突進を受けた牧田君の召喚獣は一たまりもなかった、それに捨て身の突進のせいで刈谷君の召喚獣もダメージを受けている！

「今だあ！」

僕は雄叫びをあげながら刈谷君の召喚獣に連打を浴びせ掛ける。

「くっそ！ 調子に乗るなよ！」

何とか耐えた刈谷君の召喚獣は獲物を振りあげる。

「隙だらけだよ」

がら空きになった胴体を再びトンファーで連打、今度は反撃なんかさせない。

「えっ、ちよっ！」

流石に耐える事が出来なかった刈谷君の召喚獣は獲物を落とし地に伏した。

「よしっ！ あと一人！」

残っている井澤君の召喚獣と向き合う。

いざ飛び出そうとした瞬間、ドン、と大きな音が聞こえた。

「今のは………？」

そう呟なりもう一度同じ音が響く。

何となくBクラスの時計を確認する。

現在時刻は午後2時57分。 作戦開始まで後3分。

『お前らしい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

根本の声が聞こえる、まだ余裕そうな声音だ。

『どうした？ 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギプアップか？』  
それに応えるは我らが雄二、相変わらず皮肉たっぷりだ。

「死ねっ！」

井澤君の召喚獣が獲物を振り回す、でも隙だらけだ召喚獣と一体化している今なら余裕で回避出来る。

「おりやつ！」

さっきのお返しに井澤君の召喚獣を打ち据える、堪らず後退する井澤君の召喚獣に僕は確かな手応えを感じていた。

『はア？ ギプアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？ 頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『……お前ら 相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ  
けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお』

『負け組？ それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

ドン！ と4回目の音が響き渡る、多分明久がBクラスに繋がるDクラスの壁を破壊しようとしているんだろう。

「全く無茶苦茶するよ、明久は」

明久の行動力は秘かに尊敬しているところだ、僕は例え観察処分者だとしても思いつきもしないだろう。

時計を見るとそろそろ時間のようだ、調度良かった、僕の意識が薄れようとしている。どうやらこっちも時間切れみたいだ。

『……さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？』

「最下位クラスが。いい加減に、諦める！」

井澤君の召喚獣が獲物を構えて走り出した。

『さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

「・・・・・・・・やだね」

僕は手にしたトンファーを井澤君の召喚獣の足元に投げ付ける。

『けつ。言ってる。どうせもつすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

僕の投げたトンファーが井澤君の召喚獣の足に絡みつき転ばせた。

『・・・・・・・・態勢を立て直す！一旦下がるぞ！』

雄二が指示を出すのとほぼ同時に意識が体に戻ってきた、速く下がらなきゃ！

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

根本の声をBGMに僕達は後退する。当然Bクラスのメンバーも追いついてきた。

「あとは任せたぞ、明久」

「明久あー！　ぶちかませ！」

僕と雄二が声を上げる。

ジャスト午後3時………作戦スタート。

「だああーっしゃあー！」

ドゴォッ

咆哮のような明久の声と共にBクラスの壁の一部が破壊された。

「ンなっ！？」

余りの出来事に根本の顔がひきつっている………ざまあみる。  
それにBクラスの戦力のほとんどは僕達を追って教室から出ていた。

これはもう又とないチャンスだ。敵は裸の王様同然なのだから。

「くたばれ、根本 恭二いーっ！」

明久達が大声を出しながら根本に駆け寄るのが見える……

ただ根本の近衛部隊に行く手を遮られてしまった。

広い教室のせいで明久達と根本の距離はかなりある。

「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だったな！ お前らの奇襲は失敗だ！」

さっきのマヌケな姿を隠すように笑う根本。

確かに明久達の奇襲は失敗した、Fクラスの点数では近衛部隊は突破出来ない。

ただとあれで明久達の任務は完了した。

この辺で話しを変え教科の『特性』の説明をしようか。

学校なんだから当たり前だけど各教科にはそれぞれ担当教師がいる。

教師達の性格も様々だからテスト結果もその教師独自の特徴が現れる。

例えば、数学の木内って先生は採点がすぐくる早い。

例えば、世界史の田中先生なんかは生徒に甘く点数の付け方が緩い。

例えば、今明久と一緒にいる英語の遠藤先生は、心が広いのか諦めが早いのか多少のことには目を塞いでくれる。

なら保健体育はどうだろう？

保健体育は採点も普通だし、甘くない……っていうかむしろ厳しいし遠くにいる人戦えるわけじゃなければ、上手く言いくめることも出来やしない。

保健体育の特性。それは、担当が体育教師だからこそ……

ダン、ダンッ！

出入り口をFクラスに封鎖されたBクラスの教室内は、真夏を思わ

せる程の暑さだ。

頼みの綱のエアコンも壊れてしまい、窓を開けるしか涼を得る手段がない。

その窓から屋上よりロープを使って飛び込む人影が2人分、根本の前に着地する。

そう、保健体育の特性は、担当が体育教師だからこそその――ありえない行動力。

「・・・・・・・・・・Fクラス、土屋 康太」

「き、キサマ・・・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・Bクラス根本 恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムッツリイニーーッ！」

明久達が近衛部隊を引き付けたせいで孤立した根本に、逃げ場なんかあるはずがない。

「――試験召喚」

『Fクラス 土屋 康太 保健体育 441点  
VS

Bクラス 根本 恭二 203点』

康太の召喚獣が武器の小太刀を振るい、根本の召喚獣を一蹴する。

この瞬間、Bクラス戦は終結した。

## 第7話 根本を倒せ！（後書き）

今回はかなりオリキャラがでしゃばってしまいました。はたしてこれでいいのかな。

このような駄文をお読み下さり真にありがとうございます。

P S 明久とオリ主の書き分けが出来ていないことをお詫び申し上げます、これからもっと精進しようと思います。

## 第8話 ほつと一息（前書き）

放置していた分を取り戻したいと思っています。

前回がかなり長かったので今回は短くしました。

## 第8話 ほつと一息

問 以下の問いに答えなさい

『女性は一（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路 瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井 明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

沢渡 真琴の答え

『処刑』

教師のコメント

死んでしまいます。

土屋 康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達するころに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです

「明久、随分と思い切った行動にでたのう」

終戦後、Bクラスにきた秀吉が開口一番にそんな事を言った。

「うう・・・・・・・・。痛いよう、痛いよう・・・・・・・・。」

手を抑えて呻く明久、まあ素手で鉄筋コンクリートに大穴空けたんだから当たり前だけどさ・・・・・・・・。

「とりあえず明久、手を出してよ」

保健室から持って来た救急箱を傍らに置いて処置を始める。

「ありがとう、真琴・・・・・・・・なんだか君が天使に見えるよ」

「何言ってるんだか・・・・・・・・それよりも明久、ちょっとしみるかも」

ガーゼを消毒液に浸し明久の手に塗り付ける、明久の体が一蹴震えるけど気にしない。

「なんとも・・・・・・・・お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？ もっと褒めてもいいと思うよ？」

「後の事を何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「・・・・・・・・遠回しに馬鹿って言ってるじゃない？」

いや、割と直球で言っていると思う。

「これでよしと・・・・・・・・。まあ仕方ないじゃん、馬鹿なんだし」

「真琴！　いくらなんでも直球過ぎるよ！」

学校の壁を破壊した明久は即効で職員室に呼び出されていた、でも留年とか退学じゃないらしいから良かった良かった。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二が明久の肩を叩きながらそう締めくくった。

馬鹿が強みか、うん的を居てるな。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「・・・・・・」

がつくりとうなだれ床に座り込む根本。さっきまでの威勢は何処へやらおとなし過ぎで不気味だ。

つてか今回の文章3点リーダー多くない？

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言に周りの皆から困惑の声が上がる。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

その言葉で僕達は得心のいった表情を浮かべる、どうやら雄二の性格や手口を理解してきたらしい。

「……………条件はなんだ」

覇気もなく根本が問う。

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

酷い言い方だけど、それだけのことをやったんだ、本人も認めているみたいで何も言わない。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

昨日の昼間に雄二が言っていた取引の提案をする。

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。」

そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……………それだけでいいのか？」

根本が疑いの視線を向けてくる、まあ昨日の段階ではこれだけでよかったんだけど。

「ああ。Bクラス代表がこれを着て言った通に行動してくれれば見逃そう」

そう言いながら雄二が取り出したのは、僕と秀吉が今朝着た女子制服。

根本の制服を手に入れる為の手段だ、心無しか雄二の個人的な感情もあるみたいだけど。

「ば、馬鹿なことを言うな！ この俺がそんなふざけたことを……………」

あわてふためく根本、嫌なのはわかるけど今更どうにもなるまい。

『Bクラス生徒全員で必ず成功させよう！』

『任せて！ 必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるならやらない手はないな！』

Bクラスの満場一致で根本の退路が完全に絶たれた、どれだけ人望がないんだよ。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！ よ、寄るな！ 変態ぐふっつ！」

「とりあえず黙らせました」

自分達の代表を見限り腹部に拳をぶち込みBクラス男子、その顔には一片の迷いもない。

「お、おう。ありがとう」

流石の雄二も目を点にしていた。

「では、着付けに移るとするか。明久、真琴、任せたぞ」

「了解っ」

「ラジャー！」

僕達は白目を剥いて倒れ伏す根本の制服を脱がす。

「……精神的にかなり負担がかかるなこの作業、手早く終わらせよう。」

「う、う………」

もうちょっと寝てればいいのに、根本がうめき声をあげはじめ。

「ていつ！」

「おりやつ！」

念を入れて追加攻撃。再び白目になった根本の制服を剥ぎ取り、女子制服を着せる。

「うーん……………。これどうするんだろう？」

悩む明久、女子制服なんか触った事無いから当然だよね。

「明久、後は任せてよ。僕がやつとくから」

「良いの？」

「良いも悪いも、明久は女子制服の着せ方なんか知らないじゃん」

僕は今日、着たばかりだ。やり方は覚えてる。

「……………それもそうだね、分かった真琴、後よろしく」

言い残し明久は根本の制服を持って足早に去っていく。これでようやく僕達の作戦は終了だ。

「さてと、続けますか」

眩いて作業に戻る。

「私も手伝うよ」

不意に声がかけれ顔を上げるとBクラスの子が近くに来ていた。

「そうだね、お願い」

「じゃ、やりましょ」

「うん、どうせなら可愛く仕立てようよ」

「それは無理。土台が腐っているから」

等と軽口を叩きあいながら完成した根本 恭二女装Verは悪趣味の一言だった。

「こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！」

事件の犯人みたいに両腕を掴まれ歩かせられている根本が声を上げる。

「いいからキリキリ歩け」

でも残念だったね、今この場には君の仲間はいないんだ。

「さ、坂本め！ よくも俺にこんなことを――」

「無駄口を叩くな！ これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！」

「き、聞いてないぞ！」

それは僕も初耳だ、いつの間に……。まあ、根本にも忘れられない青春の1ページになるだろう、良い事だ。

この後、撮影会までこなした根本は自分の制服が見付からなかった為に、そのままの姿で家まで帰る事になったらしい。

……。明久、グッジョブ！

……。  
……。  
……。

「ジャン、ありがとう。おかげさまで間に合ったよ」

女子制服を着たまま帰った根本を見送った後、僕も帰路についていた。まずはスクーターを帰す為にジャンの家に寄っている。

「マコト、おかエリ、無事でよかったヨ」

朗らかな顔で僕を迎えてくれたジャンにスクーターの鍵を渡す。

「じゃあね、ジャンお休み」

「ウン、マコト、明日は寝坊しないでネ」

ジャンに手を振ってから家に向かう。

「ふう、疲れた……………」

家に帰ると疲労を感じた、どうやら思った以上に体力を消耗していたらしい。

考えられる原因は、

「召喚戦と一体化した事かな？」

どうやらあの状態では動いた分だけ体力を使うらしい。

「まあ、滅多に使うわけでも無いから気にする事もないか」

そう考えながら部屋のベッドに腰掛ける、今日はもう休んだ方が良いかもしれないな。

「……………寝るか」

部屋着に着替えベッドに潜り込む、数秒もしないうちに僕は夢の世

界に案内されていた。

[illegible]

自分で感じていた以上に疲労が濃かったのか起きたのは次の日の午前9時だった。

「・・・・・・・・遅刻だあああ！」

春の陽気な空氣に僕の悲鳴が響き渡つたのは言つまでもないだろう。

## 第8話 ほつと一息（後書き）

このような文章をお読み下さった皆さん、本当にありがとうございます。

ご意見、ご感想よろしければ書き込んでくださればありがたいです。

第9話 ラストバトル でも僕は見てるだけ？（前書き）

長い間を開けて申し訳ありませんでした。

今回、何時もよりもクオリティが低下しているかもしれませんが、ご容赦ください。

第9話 ラストバトル でも僕は見てるだけ？

「・・・・・・・・ねえ」

「ん？ なんだ？」

「・・・・・・・・さつき雄二が話していた、大化の改新っていつのこと？」

「3年生にもなって、まだそんなことも知らないのか？ 翔子は馬鹿だなあ」

「・・・・・・・・まだ習ってない。雄二の頭が良すぎるだけ」

「覚え方は簡単だぞ？ 『無事故の改新』で覚えるんだ」

「・・・・・・・・無事故？」

「忘れるなよ？ 大化の改新は無事故で起きたんだから――」

「うん」

「――625年だからな」

「・・・・・・・・わかった。きちんと覚えた」

「よし。忘れるなよ」

「・・・・・・・・大丈夫。絶対に忘れない」

夕焼け空が目に染みる帰り道、風に乗って男の子と女の子の話し声が聞こえてきた。

何と無く声のした方を見ると見覚えのある姿が見える、あの2人はたしか・・・・・・・・

「坂本君に、霧島さんだっけ？ 相変わらず仲いいんだな」

誰とも無く呟いて前をみる。

あの2人とは同級生だけどあまり話した事は無い。

まあ、あの2人も人付き合いがいいとは言えないけれど。

それにしても、坂本君――

「大化の改新は、645年だよ・・・・・・・・」

Bクラス戦が終結して2日が経った。

点数補給のテストを受け終わった僕達は雄二からAクラス戦の作戦の説明を聞いていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われているにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったの事だ。感謝している」

教壇から僕達を見下ろしながら柄でもなく素直に礼を言う雄二に、ちよつとばかり面食らう。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

明久に皮肉を返すこともなくその言葉を受け止めた雄二。やっぱり何時もとは違うな。雄二も気分が高揚しているのかもしれない。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すれいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ!」

『おおーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ』

皆、最終決戦を前に気合い充分だ。これなら案外いけるかもしれない。そう思える程の熱気が溢れている。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

僕を含めた一部はこの間の昼ご飯の時に聞いていたので驚きはしなかったけれど、他の皆はかなり驚いたみたいで、ざわめきが教室の中を埋め尽くした。『どういうことだ?』

『誰と誰が一騎討ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

バンバンと机を叩き皆を静ませた雄二は説明を再開する。

「やるのは当然俺と翔子だ」

戦争のかわりに一騎討ちを行うのなら、クラス代表同士が戦うのは当然だろう。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあつ!？」

雄二の発言を聞いた瞬間声をあげた明久の頬をカッターがかすめた……危ないな、殺す気なのかだったのかな……まさかね。いくらなんでも友達を殺すなんて事……

「次は耳だ」

雄二にとって明久は友達じゃないんだ……。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば

勝ち目はないかもしれない」

さっきの明久の言葉を肯定するなら別にカッター投げなくても良かったんじゃないの？

「だか、それはDクラスもBクラスも同じだったろう？　まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった」

だけど僕達は勝った。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

どんな苦境も乗り越えてFクラスを勝利に導いた雄二の言葉を否定する人はこのクラスにはいない。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーっ！！』

皆、一斉に雄叫びをあげる、全員が雄二を信じているんだ。

「さて具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？　何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

日本史か………なんてたら、別に雄二の得意科目が日本史というわけではないし。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

小学生のレベルで上限ありのテストか。それだと満点を前提にしての注意力の戦いなるな。それなら召喚獣で戦うよりは勝機があるかもね。

「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言うとおりじゃ」

勝機があるかもしれないけどまだまだ不利だ、これぐらいでは作戦とは言えないような………。

あれ？ 小学生の時、雄二は確か………。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「?? それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか?」

「いいや。アイツなら集中なんていていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

監視の中で出来る妨害はたかが知れている、そんな悪戯みたいな事しても霧島さんが揺るぐ筈がない。

「雄二。あまりもつたいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう?」

クラス全員を代表して秀吉が雄二を促す。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

かぶりを振って、雄二は口を開いた。

「俺がこのやり方を採った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

やっぱりね、思い出したよ。ある問題ってやつを

「その問題は――」

「『大化の改新』……かな?」

呟いたつもりだったけど思いの他大きかったらしく、皆が僕を見る。

「・・・・・・・・、ごめん、続けて雄二」

話しの腰を折ってしまった僕を雄二は軽く睨みつける。

「お前な・・・・・・・・。まあいい、真琴の言った通り、問題は『大化の改新』だ」

「大化の改新？ 誰が何をしたのか説明しろ、とか？ そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

明久の言ったような問題は普通の小学校にはまず出ては来ない。

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純にというところー何年に起きた、とかかのう？」

「おつ。ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

大化の改新の年号なんて問題、普通だったなら誰でも解けるはず、普通だったらね。

「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

雄二の言葉を聞いて顔をそらす明久、間違えたんだ・・・・・・・・。

「だが、翔子は間違える。これは確実にさうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

成る程、それなら確実に勝てる………よね？ 何か不安何だけど。

「あの、坂本君」

「ん？ なんだ姫路」

「霧島さんとは、その………仲が良いんですか？」

姫路さんが疑問に思うのも無理はない、雄二は霧島さんの事を呼び捨てにしたり『アイツ』と呼んでいるからね。

まあ、雄二と霧島さんは幼なじみなんだから当たり前だけど。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員狙ええっ！」

明久の指示の下、カミングアウトした雄二に向けてクラスの男子の殆どが上履きを投げようと構える。

「なっ！？ なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！ Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

クラスの男子がどこかの軍隊のような統率の取れた動きを見せる。

これがクラスの団結と言うのだろうか……いや言わないよね。

「遺言はそれだけか？ ……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押しつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

何て恐ろしい事を考えるんだ明久は。そんな事されたら僕なんか1ヶ月をお粥で過ごさなきゃいけなくなる。

「あの、吉井君」

「ん？ なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……………」

「え？ なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？ それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとしているの！？」

明久はさつさと2人の気持ちに気付いた方がいいかも……………なんて、もてない僕が心配することじゃないな。

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

このクラスで唯一冷静な秀吉が手を叩いて皆を鎮める。

「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島 翔子じゃぞ？  
男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

そう言えば霧島さんは同性愛者なんじゃないかって噂があつたな、  
いつ誰が流したかは分からないけど。噂は本当なの？

「むしろ、興味があるとすれば・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そうだね」

全員の視線が姫路さんに集中する。

「な、なんですか？ もしかして私、何かしましたか？」

皆が霧島さんの噂を信じてるみたいだ。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで小さな頃に間違えて嘘を教えて  
いたんだ」

話を纏めるべく雄二は強引に話しを進める。それにしても昔はか  
なり仲が良かったみたいだけどなあ。

「アイツは1度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

1度でも覚えたなら、何年たとうと絶対に忘れない程の記憶力、それを逆手にとる。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そしたら俺達の机は」

『システムデスクだ!』

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

午前10時。僕達Fクラスは最後の戦いの為にAクラスへと来ていた。

「では、両名共準備は良いですか?」

「ああ」

「・・・・・・問題ない」

Aクラス担任の高橋先生が立会人を務める中遂に決戦が始まろうと

していた。

当初の予定では雄二と霧島さんの一騎討ちだったのだけど、流石にFクラスの提案をAクラスがそのまま飲み込むわけがない。

交渉の結果5対5の団体戦形式で戦争を行う事になったと雄二から聞いた。

「それでは1人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

Aクラスから秀吉のお姉さんの優子さんが出て来た。

こっちは誰が出るんだろ。

「ワシがやろっ」

秀吉が出て来た。成る程姉弟対決か……何故だろうか、嫌な予感しかない。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

ああ・・・・・・・・やっぱりか。

「じゃーいいや、その代わり、ちょっとこっちに来てくれる?」

「うん? ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上?」

そりゃ怒るよな、あれだけ罵倒しまくったんじゃな。

『姉上、勝負は――どうしてワシの腕を掴む?』

『アンタ、Cクラスで何をしてくれたのかしら? どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ?』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して――あ、姉上っ! ちがつ・・・・・・・・! その間接はそっちには曲がらなっ・・・・・・・・!』

ガラガラガラ

扉が開いて優子さんだけが入って来た。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる?」

にこやかに笑いながら口を開く優子さん、返り血を浴びてなければその笑顔はとても可愛いらしく見えただろう。

「い、いや……………。ウチの不戦勝で良い……………」

優子さんの雰囲気を押されて流石の雄二も何も言えないらしい。

「そうですか。それではまずAクラスが1勝、と」

高橋先生が手元のパソコンを操作してディスプレイに結果を表示させる。

『Aクラス 木下 優子 生命活動 WIN  
VS

Fクラス 木下 秀吉 DEAD』

突っ込むべきなのに場の空気がそれを許してなかった。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

あの人は、確か佐藤 美穂って名前だったかな、結構成績もいいはずだ。

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？ 僕！？」

こつちからは明久か、さてと。この次に期待しようか。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

そう言い切る雄二の顔は自信に満ち溢れていた。

「ふう．．．．．やれやれ、僕に本気を出させてこと？」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

いきなり変な事を言い出した明久と雄二にAクラスは愚か、味方のはずのFクラスまでざわめきが起こる。

『おい、吉井って実はすごいヤツなのか？』

『いや、そんな話しは聞いたことないが』

『いつものジョークだろ』

酷いこと言ってるようで大体は事実だから仕方ない。

「吉井君、でしたか？　あなた、まさか．．．．．」

佐藤さんは何にやら気が付いたらしい。ってことは明久には何か秘密があるのだろうか？

「あれ、気付いた？　ご名答、今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

「それじゃ、あなたは……………」

「そうさ、君の想像通りだよ。今まで隠して来たけれど、実は僕――」

そこまで喋った明久は1度大きく息を吸い込んで再び口を開いた。

「――左利きなんだ」

『Aクラス 佐藤 美穂 物理 389点

VS

Fクラス 吉井 明久 62点』

明久の召喚獣はゴミみたいに蹴散らされた。

「このバカ！ テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「そうだよ！ 一瞬期待しちゃったじゃないか！」

「み、美波！ 真琴！ フィードバックで痛んでいるのに、更に殴るのは勘弁して！」

あんなに点数に開きがあるなら小手先じゃどうにもならないよ。

「よし。勝負はここからだ」

「ちょっと待った雄二！ アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう！」

「信頼？ 何ソレ？ 食えんの？」

しかしこれで追い詰められてしまった。

「では、3人目の方どうぞ」

「・・・・・・・・・・（スック）」

康太が立ち上がる。

保健体育ならば誰にも負けることがない康太ならAクラスに勝てる可能性が高い。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからはボーイッシュな女子が出て来た、見たことが無い人だ、転入生かな？

「1年の終りに転入してきた工藤 愛子です。よろしくね」

「教科は何にしますか？」

「・・・・・・・・・・保健体育」

康太の実力を100%発揮できる唯一の教科を選択する。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

康太に話しかける工藤さん、何だか自信満々だけど…………。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ キミとは違って、実技でね。」

大胆な発言だなあ、周りの皆はなんだか興奮気味だし。

康太から視線を外しギャラリィに向ける工藤さん。悪戯っ子のような目の先にいるのは明久だ。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？ もちろん実技で」

「フツ。望むところ——」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

挑発に乗りかけた明久を止める為とはいえ酷いこと言うな…………。

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが」

目も潤んでるし明久はかなりダメージを受けているみたいだ、当たり前だよな。

「じゃ、その小さい君は？」

どうやら僕のことらしい、どうでもいいけど『小さい』は余計だ。

「遠慮しとくよ」

それだけ答えておく。工藤さんは意外な顔をした。そんなに僕は飢えているように見えるのだろうか？　だとしたらショックだ。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はい。試験召喚っ」と

「……………試験召喚」

2人をデフォルメした召喚獣が現れる。康太はBクラスの時と同じ小太刀を持った忍者。対する工藤さんの召喚獣は、

「うわぁ、でっかい斧だ」

セーラー服にバカでかい斧、何というミスマッチ。

それに腕輪も装備している。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

少年のような華奢な見た目とは裏腹の艶っぽい笑いを浮かべ、腕輪を発動させた工藤さんの召喚獣が動き出す。

召喚獣の2倍はあろうかという斧を持ちながらも、重さを感じさせないスピードで康太の召喚獣に肉薄する工藤さんの召喚獣。

「それじゃバイバイ。ムッツリーニ君」

「危ない！ ムッツリーニッ！！」

Fクラスの誰かさんが悲鳴交じりの声を上げる、確かに危険な状況だ。ただどーー

「・・・・・・・・加速」

――『寡黙なる性識者』の名は伊達じゃなかった。

「・・・・・・・・加速終了」

一瞬の間に切り刻まれた工藤さんの召喚獣。

そして点数が表示される。

『Fクラス 土屋 康太 保健体育 572点  
VS

Aクラス 工藤 愛子 446点』

凄いな康太！　さすがに総合科目の8割が保健体育の点数なだけはある。

「そ．．．．．そんな．．．．．この、ボクが！」

あまりのショックにへたり込む工藤さん、彼女なりに自信があったからあんな態度をとっていたんだろうけど相手が悪かった。

「これで、2対1ですね。次の方は？」

自分の担当する生徒が負けたのに冷静な高橋先生。クールビューティって言葉が似合うよね、あの先生。

「はっ、はいっ。私です！」

高橋先生の声に合わせて出て来たのは我等がエース姫路さん。対してAクラスから出て来たのは。

「やはり来たか。学年次席」

霧島さんに次ぐ高得点を誇る秀才、久保　利光。

「ここが1番の心配どころだ」

雄二が言う通りだ、久保君と姫路さんの実力は拮抗している。どちらが勝ってもおかしくはない。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

迷わず即断する久保君。

「ちょっと待った！ 何を勝手に――」

明久が口を挟む、でもこの戦争のルール上なんの問題も無いから仕方ない。

それに、

「構いません」

「姫路さん？」

――姫路さんは今までに無いくらい強い目をしていた。

「それでは、始めてください」

「試験召喚！！」

高橋先生の号令と共に現れる2人の召喚獣。

『Fクラス 姫路 瑞希 総合科目 4409点  
VS

Aクラス 久保 利光 3997点』

姫路さんの召喚獣が久保君の召喚獣を一蹴する、とんでもない強さ

だ。

「マッ、マジか!？」

「いつの間にこんな実力を!？」

「この点数。霧島 翔子に匹敵するぞ……!」

周りで見ていた面々も驚愕の声を上げている、何と無く予想していた僕も同じ気持ちだ。

「くっ……! 姫路さん。どうやってそんなに強くなったんだ!？」

声を荒げる久保君。去年までは互角だった筈の成績が大きく離されているのだから当たり前だ。

「私、このクラスの皆が好きなんです。人のために一生懸命な皆がいるFクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい! だから頑張れるんです」

熱を入れて語る姫路さん、こんな最下位クラスをそこまで思っれていたなんて、感動ものだよ……。

「これで2対2です」

若干驚いた顔の高橋先生、姫路さんの急成長が予想外だったのか、それともFクラスがAクラス相手に互角の戦いをしているのに驚いたのかわからないけれど、冷静沈着な高橋先生にしては珍しい。

「最後の1人どうぞ」

「……はい」

「俺の出番だな」

Fクラス、Aクラス両方の代表が前に出る。最後の戦いだ。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史。内容と方式は小学生レベルで、百点満点の上限ありだ！」

雄二が指定した条件にAクラスからざわめきが起こった。

「上限あり。だって？」

「しかも小学生レベルって満点確実じゃないか」

「注意力と集中力の勝負になるぞ」

波紋のように広がるざわめきを制するように高橋先生が口を開く。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいいけませんね、少々このままでお待ちください」

教室から出て行く高橋先生、小学生のテストも何かの資料として持っているのだろう。

「雄二！」

明久が雄二に向かって手を差し出す。

「後は任せたよ」

「ああ任された」

その手を取りながら明久に応じる雄二、なんだかんだあるけど2人は親友だ。

明久に続いて僕も声をかけた。

「油断しないでよ、雄二」

「分かってる、Aクラスに勝つために今まで戦ってきたんだ。それをフイにする気はない」

雄二は力強く言い切る、Fクラスの王様の言葉には説得力がある。

「……………（グッ！）」

「ムツッリーニ、お前の力には随分助けられた。感謝している」

他の皆も僕達と同じように雄二に向かって思い思いの言葉を投げ掛けていく、最後は姫路さんだ。

「坂本君、あのことを教えてくれてありがとうございました」

ん？ あのこと？

「ああ、明久のことか。気にするな、後は頑張れよ」

「はいっ！」

満面の笑みで返事をする姫路さん、明久は困惑しているみたいだ。だから早く気付けばいいのに、そうすれば僕も諦めがつくってものだ。

「では最後の勝負、日本史を行います。今から問題を配りますが始まるまで見ないように」

先生が雄二と霧島さんにテスト用紙を配布する。

「制限時間は50分。満点は100点です。不正行為等は即失格となります。いいですね？」

「・・・・・・はい」

「わかっているさ」

最終確認をする先生、そして時は来た。

「では、始めてください」

雄二と霧島さんがテスト用紙を表向きにしてペンをとる。最後の戦いの始まりだ。

テストは視聴覚室で行われており、僕達はAクラスの大型ディスプレイを通して様子を見ていた。当然ながらちテストの問題も見えている。

「沢渡、いよいよだな」

隣にいた近藤君が話しかけてきた、近藤君の顔は緊張で強張っている。

「うん、後は全部雄二に任せるだけだよ」

「そうだな」

近藤君以外の皆も緊張の面持ちだ、まあ僕も同じだけど。

やっぱり、こ1番の勝負ってやる方も見る方も緊張するよね。

固唾を吞んで見守る僕らの目の前にあの問題が映された。

（ ）年 大化の改新

「あ………あつた！」

誰かの声上がる。

「これで僕らの卓袱台が、システムデスクに！」

今は明久だかなり興奮している、皆も明久に同調している……  
・けど、僕の心の中ではさっき教室で雄二の説明を受けた時に感じていた不安がぶりかえしていた。

一体何なんだこの不安は。

「いや違う！ 僕達は勝つんだ！ そうだよね明久！」

「そうだとも真琴！ 最下位に位置した僕らの歴史的な勝利だ！」

『うおおおおッ！！』

皆が雄叫びを上げる、そうだともこんな不安なんか――

☐ Aクラス 霧島 翔子 日本史 97点

VS

Fクラス 坂本 雄二 53点<sup>☐</sup>

――不安の中かい・・・・・・

## 第9話 ラストバトル でも僕は見てるだけ？（後書き）

「始めまして、今回モブキャラばりの出番しかもらえなかった沢渡真琴です。あまりに暇なので、作者の所に鉄パイプとスタンガンを持って後書きに出してくれるように直談判してきました」

「今回と次回とで『バカとテストと転生者』は原作1巻分終了という区切りを迎えます。

思えば超絶テキスト男、斎藤のせいで読んで下さっている皆様には多大な迷惑をかけてしまいました。斎藤に代わりまして謝罪します」

本当にご迷惑をおかけしました、申し訳ありませんでした。

「あれ……何だろ、今のノイズは？ まあ、いいか。

さて本作を読んでくれた皆さん、お楽しみ頂けましたか？ 暇つぶし程度にはなっていれば有り難いですけどね。

良かったら感想や批評なんかを書いて頂ければ嬉しいです。感想批評は斎藤の生きる糧となりますから」

「斎藤が言うにはこれから後書きは僕の担当だそうで、今激しく緊張しています。

では今回はこの辺で失礼します。では読者の皆様ここまでお読み下さり有り難うございました！」

**第10話 試召戦争編 エピソード（前書き）**

2日連続投稿です！

読んでくださっている方々有り難いございます。

感想お待ちしております。

## 第10話 試召戦争編 エピローグ

問題 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです。

「3対2でAクラスの勝利です」

テスト終了後僕らは全員で視聴覚室に乗り込んだ僕達に高橋先生が告げる、分かってますよ、Fクラスが負けたのは。

「……………雄二。私の勝ち」

「・・・・・・・・殺せ」

当たり前だ。

「いい度胸だ、殺してやる。歯を食いしばれ!」

「上等だよ! 袋にして、海に捨ててやる!」

「2人とも、落ち着いてください!」

僕と明久が雄二に詰め寄るも姫路さんに止められる、運がいい奴だ。

「だいたい53点ってなんだよ! 0点なら名前の書き忘れとか思  
うけどこの点数だと」

「いかにも。俺の全力だ」

「この阿呆が――!」

「少しは勉強しなよ!」

「アキ! それに沢渡も黙りなさい! アンタらだったら30点も  
取れないでしょうが!」

血相を変えていきり立つ僕達に島田さんの声がかかる。  
いくらなんでも30点も取れないなんて言い過ぎ――

「それについては否定しない!」

「――でもなかったみたい。」

「明久ってそんなにバカだったの！？ 僕だったら60点はいけるよ！」

「そんなの似たようなもんよ！」

「それなら坂本君を責めちゃダメですっ！」

明久の倍は取れているのに何がいけないんだろう？

「くっ、2人ともなぜ止めるんだ！？ この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！！」

「明久の言う通りだよ！ そうだ、心臓もえぐり出してやろう！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

くそっ、何で姫路さん達は僕達を止めるんだ！？ これは正当な罰の筈なのに！

「……でも危なかった。雄二が所詮小学校並の問題だと油断してなければ負けていた」

「言い訳はしねえ」

潔い雄二の様子を見て僕達の怒りもだんだんと収まっていった、アイツなりに反省しているみたいだ。

「・・・・・・・・・・ところで約束」

約束・・・・・・・・・・ああ、そう言えば負けた方は勝った方の言うことを一つ聞かなきゃいけないんだっけ。

「・・・・・・・・・・（カチャカチャ）」

あ、康太がカメラの準備をしてる・・・・・・・・・・って皆負けたのに異常に興奮してるんだけど！

「わかってる。何でも言え」

「・・・・・・・・・・それじゃーーー」

霧島さんが言葉を重ねる度に皆の興奮が高まってくる。

そして

「ーー雄二。私と付き合って」

皆フリーズしました。

「やっぱりな、お前。まだ諦めてなかったのか」

「・・・・・・・・・・私は諦めない。ずっと雄二のことが好き」

状況についていけない両クラスの生徒を放って各クラス代表は会話を続ける。

「その話しは何度も断っただろ？ 他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他のひとなんて興味ない」

成る程、霧島さんは雄二が好きだったのか。小学校の時は仲がいいなとは思わなかったけど多分あの時から一途に思ってたんだろくなあ。

そんな一途に思い続けたから、異性に興味がないって噂がたったのか。

「拒否権は？」

「……ない、約束だから。今からデートに行く」

言うなり霧島さんは雄二の制服を掴み引きずって行く。

「ぐあっ！！ 放せ！ やっぱこの約束はなかったことにー」

叫ぶ雄二を気にせずに扉を閉める霧島さん、その模様を皆呆然と見ているだけだった。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終了だ」

そんな中ドスの効いた声が僕達に投げ掛けられた。

「あれ？ 西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ、今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思つてな」

「……………え？ 『我が』？」

「おめでとう。お前らが戦争に負けたおかげで福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから1年死に物狂いで勉強できるぞ」

「……………なにいッ！？……………」

もはや死刑宣告とも同意議な担任変更の連絡きFクラス全生徒が驚愕の声を上げる。

まさか、また西村先生が担任になるなんて……………これじゃ去年と一緒にじゃないか。

「確かにお前らはよくやった。だが、いくら『学力が全てではない』からといって、人生を渡っていく上で強力な武器の1つなのにないがしろにしてはいけない」

なんてマトモな意見だ、見た目が人間よりはゴリラかなんかの方が近しいのに。

「吉井と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ開校以来初の観察処分者とA級戦犯だからな」

良かった、僕はまだ目をつけられてないみたい。

「そうはいきませんよ！　なんとしても監視の目をかいくぐって今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「……お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

そんな発想があつたら、今頃明久は模範的な生徒になっている筈だ。

「とりあえず、明日から補習の時間を2時間設けてやろう」

「そんな！　それじゃのんびりできないじゃないですか！」

「沢渡！　貴様、何の為に学校に来ているんだ！　貴様も吉井と坂本同様しっかり監視してやるからな！」

しまった！　墓穴を掘った！

『全く、鉄人の前であんな事言うなんて沢渡もバカだな』

『ああ。あんなバカは放って置いて俺達は青春を謳歌しようぜ』

『そうだな』

「当たり前だか吉井、坂本、沢渡に限らずお前らも監視するからな。心しておけよ！」

『『何だと！！！』』』

Fクラスの面々が叫び、辺りは阿鼻叫喚の様相だった。

「こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つ！」

Fクラスのざわめきの中僕の耳に斬新な告白が聞こえた、今は明久？

声のした方に目をやると、島田さんに首をロックされたまま何処かに連れていかれる明久が見えた。

その後を姫路さんが追っていく。

「いやああッ！ 生活費が！ 僕の栄養があッ！」

明久の悲痛な叫び声が聞こえてきた。

「ま、頑張ってね〜明久」

島田さんと姫路さんが明久を連れて行った後、残っていたメンバーもそれぞれ帰り支度をしていた。

明日からみかん箱とゴザの生活だと思つと、1週間くらいしかお世話にならなかった筈の卓袱台と古畳が名残惜しく感じる。

『明日から鉄人かよ、最悪だなあ』

『そうだよな、ったく。折角あのゴリラの魔の手から逃れたつてのに』

『俺は姫路さんさえいればそれでいい』

教室内の各所から嘆きが聞こえる。

……最後の人、違うよね？

ほとんどが帰路につきほんの少し前までは騒がしかった教室も静寂が包んでいる、そんな教室に僕は1人で残っていた。

理由なんか無い、何と無く帰りそびれたただけだ。

もしかすると新学期早々に起こした試召戦争騒ぎの余韻にでも浸っていたかったのかもしれない。

「……帰ろうかな」

誰ともなく呟いて鞆を持つ、明久と雄二が拉致され。秀吉が病院送りになった、康太はムツリ商会関係で何かあるのか、いつの間にかいなくなってたから今日は1人で帰る事になりそうだ。

体は大丈夫だけど気分が重い、約1週間で色んな事が起きたから疲れているんだろうか？

下駄箱から靴を取り出し外に出る、その瞬間柔らかい風が僕の体を包み込んだ。

風をあびながら屋根の下から出ると春の日差しが辺り一面に降り注いでいる。

「春なんだなあ」

間抜けな感想が口について出るが仕方ない、間抜けなんだから。

単純な僕は、春の陽気に感化されてさっきまでの重い気分なんかどこかへいつていた。

「そうだった、まだ新学期が始まって1週間しか経っていないんだ」  
その1週間で過ごした濃密な時間がフラッシュバックのように思い出される。

「じゃ、帰るか！」

運動部の号令や掛け声の中をのんびりと歩き出す、今日はいいい天気だし絶好の運動日和だろう……僕はやらないけどね。

明日からはみかん箱にゴザの最悪な環境だけど、まあ住めば都って言うしなんとかなる筈だ。

それに、この1週間で少なくとも今年1年は退屈しないって事が分かったし、中々有意義な1週間だったじゃないか。

穏やかな日差しのもと、明日から始まる新しい生活に思いをはせながら僕は足を踏み出した。

「試召戦争編・終」

## 第10話 試召戦争編 エピローグ（後書き）

「こんにちは、沢渡 真琴です。終わりましたよ試召戦争、色々失敗して僕も大変でした。僕のクラスの皆も全力を挙げていましたから戦争中は鬼気迫るものがありましたよ。」

「さて、次回から2〜3話は番外編となるそうです。番外編では別な作品とクロスさせたり、僕の昔話なんかやりたいそうですが超絶テキトー男の斎藤ですからね。あまり期待はしない方がいいかも知れません」

「では今回はこの辺で失礼します。読んでくれた皆さん、感想お待ちしております！」

お読み下さって有り難うございました！」

## I W G P 編プロローグ そうだ池袋行こう（前書き）

長い間間を置いて申し訳ありませんでした。

今回は石田衣良著「池袋ウエストゲートパーク」とのコラボになっています、双方の作品のファンの方にはお目汚しにしかならないでしょうがご容赦ください。

## I W G P 編プロローグ そうだ池袋行こう

「あ、雄二、今度遊ばない？」

「真琴が！？ 悪いがそれどこじゃ……いや、頼む、かくまってくれ！ じゃないと俺の明日が……」

「何か意味わかんないけど分かった、家に来なよ」

「すまない、恩に「……雄二、逃がさない」しよ、翔子！？ 何で―――バタツ！」

「えっ！ 雄二どうしたの！」

「……真琴、雄二はなんともない」

ブツッ！ ツー ツー

「雄二……ご愁傷様」

試召戦争騒ぎが終わって一息ついた頃、僕と明久は暇だった。

それと言うのも。Aクラスに惜敗し、霧島さんと付き合い始めてから我らがFクラス代表は多忙を極めているからに他ならない。

まあ、ぶつちやけると。霧島さんの熱烈なアプローチから逃げ回る雄二に僕達と遊ぶ余裕が無いだけだね。

秀吉は新入生を迎えた演劇部のホープとして精力的に活動してるし、

康太は試召戦争中多少おざなりになっていた趣味を再開して2人も忙しそう。

そんな親友達と部活は帰宅部、趣味は暇つぶしで彼女いない歴〃実年齢という灰色の学生生活を送っている僕と明久とでは微妙にズレて来るのは当たり前なんだけどね（まあ康太の趣味はどうかと思うけどさ）

お互い1人暮らしでゲームやら漫画なんかには飽きていた僕と明久は、クダクダとダベりながら過ごすのが日課になっていた。

毎度金欠の明久に併せて集まるのは近所の公園、何だか散歩途中の爺さんにもなった気分。退屈は人を老いらせるのだろうか？

「明久」

憎たらしいくらいの青空を見上げながら隣でぼんやりしてる明久に呼びかけてみる。

「なに、真琴？」

「暇だし何か面白いことやってみて」

「いきなり無茶ブリ！？ しかもそのフリって大抵何をやっても滑るよね！？」

「面白くなかったら、明久の恥ずかしい秘密を暴露してね」

「無茶ブリの上に罰ゲームまであるの？　僕にとって最悪な事だらけじゃないか！」

「仕方ないだろ、暇すぎて明久をいじるしかないんだから」

「くそつ、なんて奴だ。本当に友達なのかが疑わしいくらいだよ……」

ため息混じりに呟く明久、まあ仕方ない明久はいじられる運命にあるんだから。

会話が途切れ、沈黙が僕達を包み込む。

今日もこのままグダグダに終わりそうだな――

「真琴じゃないか！」

――わっ！　びつくりした……誰だよ全く。

声のしたほうをみると、中年男が僕達に向かって足を進めていた。

「あの人、真琴の知り合い？」

少々心許ない頭髪が特徴的なその男を指差した明久が困惑気味に口を開く。

「……まあね」

たったそれだけ答えて目をそらした、中年男は僕の目の前に立つと肩を手を置いた。

「やっぱり真琴だな、この韋駄天野郎、今は真面目にしてんのか？」  
口は悪いが何となく懐かしむような声音を滲ませる男に小さく頭を下げる。

「ご無沙汰してます、吉岡さん」

イマイチ状況を理解出来ていない明久、当たり前か。

「明久、こちら池袋警察署の吉岡さん。昔ちよつとお世話になってね。吉岡さん、彼は吉井 明久、僕のクラスメートです」

とりあえず両方を紹介しておく、しかしこんな爽やか日に野郎3人で何やってんだらうね。

「お世話って、真琴に何かあったんですか？」

吉岡さんを真つ直ぐ見上げる明久。ちよつと困ったような顔をして浮かべる僕をみる吉岡さん、言っているのか迷っているんだらう。

「おイタが過ぎただけ、大した事じゃ無いよ」

口ごもる刑事さんを見かねて口を挟む、説明する気はないから曖昧に誤魔化すただけだ。

「そうなんだ、へえ。真琴が……何かイメージ出来ないや」

詳しく解らなくても吉岡さんとの関係を察したらしいね。

「真琴、お前この頃は何もやって無いよな？」

疑うような視線を向けられる、見た目は冴えなくても流石は刑事だ、眼光が鋭くて身震いしそう。

「やって無いけど、何かあったの？」

「いや、やってないなら良いんだ。それより真琴、友達を連れて池袋に遊びにこないか？ お前が来なくなってから随分と様子が変わったぞ」

急に話題を替えた、随分怪しいけど一般人には話せない事なのかな。

「なんなら、次の非番の時に案内してやろうか」

久しぶりに行くのも悪くないかな？ どうせ暇だしさ。

「いいね、明久も行くようよ」

「……でも交通費が」

「僕が出すからさ」

「本当！？ 行く行く！」

「……現金な奴だな、お前の友達は」

喜色満面の明久に呆れながら僕達は簡単に計画を立てる、こういうのって楽しいよね。ムサイ野郎だけでもさ。次の休みの日、丁度吉岡さんの非番が重なった事もあり僕と明久は池袋に来ていた、秀吉はこれたら来るって言ってたけど康太は連絡が取れなかった、何やってんだろ？ 盗撮？

ちなみに雄二は霧島さんとの鬼ごっこ、いい加減諦めたらとも思う。

「こつちだ、良く来たな」

哀愁の独身中年刑事と合流し街を練り歩いていると違和感を覚えた。

「本当だ、何か雰囲気変わってる」

「そうなの？」

「うん、僕が出入りして頃は海外から出稼ぎに来てた人も相当いたんだけど、何か少なくなってる」

僕達の話聞いてガイドの吉岡さんが振り返った。

「去年の夏頃だったか、池袋の街を浄化するって計画があつてな、その名残みたいなもんだ」

そんな事あったんだ、全然知らなかったな。

「えーっと、真琴が言ってた外国から来てた人が少ないのがその浄化計画のせいって事なんですか？」

「ああ、あの時は大変だった、池袋の人口の何%かは不法就労者が占めてたからな。それをほとんど摘発するって事がどんな事かわかるだろう？」

相変わらず刑事ってのは多忙らしい、その疲れが髪に来るんだろうか。

「……ねえ、真琴。不法就労者って何？」

隣で吉岡さんがコケるのがわかった。

「真琴、説明してやれ」

何か疲れたように聞こえるのは僕だけだろうか？

「明久、不法就労者っていうのは簡単言えば働いちゃいけないのに働いてる人の事だよ。大抵は外国から観光用のピサで来て期限が過ぎてても滞在して働いているってのが多いみたい」

へー、と明久の生返事、こいつ本当に分かってってんのかな？

「明久、理解出来た？」

「いけない事だって事は分かった」

……概要が分かっただけよしとしよう。

記憶にある光景と現実の風景の微妙な差異を確認するように街を練り歩いていく。

吉岡さんの案内でサンシャイン60やロス会館などの有名所を見て回った、休みの日でかなりの人込みがあり歩くだけでかなり疲れる。

「真琴、昔の癖は起こすなよ」

明久に聞こえないように耳元で囁く吉岡さん。

「分かってるよ、もうやりませんって。そんなに僕信用出来ないの？」

「そんなわけじゃ無いけどな。それから目上には敬語を使え」

「はい、わかりましたよ」

適当に返事を返して、前に行く明久を追い掛けた。

少し歩き疲れた僕達は池袋駅西口の近くにある公園で一休みしていた。

タバコを吸う吉岡さんのポケットから携帯の着信音が鳴り響いた。

「吉岡だ、何かあったか……そうか、分かったすぐに行く。悪いな真琴、ちょっと呼び出し食らっちゃった。俺はここで抜けるが折角

来たんだお前が友達を案内してやれ。じゃあな」

そう言つて足早に立ち去る吉岡さん、やっぱり暇人は僕達だけらしい。

時計を見ると12時を過ぎていた、ちょうどいい。

「ねえ明久、昼ご飯でも食べようかいいいお店があるんだって」

「本当？ 任せるよ」

西口公園を後にする僕達に鈍いものを打つ音が聞こえてきた。

「何だ、今の音……何か毎日聞いているような」

すぐ近くから聞こえて来る、そういえば建物の影に路地があつたな。そこから聞こえてくるんだろうか？

気になった僕は明久を連れて音の聞こえる方に足を向ける、われながら大した野次馬根性だ。

思つた通り路地から音は聞こえていた、建物から顔だけ出して路地を覗き込んでみる。

僕の視線の先では小学生位の子供達が入り込んで作っていた、子供達の周りには僕達と同年代と思わしき男が3人いる。

「何をしてるんだろう?」

僕と一緒に覗き込んでいた明久が呟いた、目を凝らし人だかりの中心を見ると横たわる子供の姿が見える、ぐったりとして動く気配が無い、どうやら気を失っているらしい。

「……あれってさ」

子供達が何をしているのか予想できたのか、強張った表情で明久が人だかりを指差した。

「そうだね、リンチ……かな?」

僕が答えた途端に慌てふためく明久、このままじゃ気づかれると思い明久を羽交い締めにする。

「どどどうしよう!?!」

「どつしよつて、ほつとくのが一番じゃない? 迂闊に関わるとろくなことないよ」

正直あの年でリンチを敢行する末恐ろしい子供と、それを黙って見守るようなキレイな奴とはお近付きになりたくない。

まあ、でも……

「そんな! じゃ、あの子はどうなるだよ!」

このお人好しは納得しないだろうけどね。

「はあ……、分かったよ、やり方はある。なんとか出来ると思うよ」

「本当！？　じゃ早くして！」

「明久、ちよつと静かにしてよ、ばれちゃうー」

「誰だよ、さつきからうるせえな！」

「ーほらね」

見つかったら仕方ない、僕と明久は隠れるのを諦め身を出した。

「何だ、お前ら？」

子供達を見ていた3人の内の1人が声を上げた、

「いや、普通に通りすぎりだけど？」

「そんな事きいてんじゃねえ！　舐めてんのか！」

いきなりキレる男、キャンキャン騒がしくて猿みたいだ。

「そつちこそ何だよ！　よつてたかって1人をイジメて、年上なら止めるよ！」

明久も負けじと返す、ていうか口調変わってない？

「ああ！　関係ない奴はすつこんでろよ！」

あの男は単純な馬鹿らしい、殆ど反射で喋ってる。これじゃ拉致が開かないな。

ポケットから携帯を取り出し番号を入力する。

「おいチビ助、何をしてる」

男の内の2人目が僕に声を掛けてきた。

「ん？ 警察に通報しようかなって」

猿男が目を剥いた。うん、更に猿っぽいな。

「てめえ！ 何勝手なことしてやがる！」

「真琴、警察呼ぶなら早くして！」

明久と猿男が声を張り上げた。3人の男に囲まれていた子供達はいつの間にか動きを止めている、1人1人不安そうな表情だ。

「警察を呼ばれちゃマズいな、おい、行くぞ」

僕をチビ助と呼んだ男が号令をかける、子供達は皆号令に従い路地の奥に消えていった。

最後には顔を真っ赤にした猿男が残された、憎々しげに僕達を睨み

つける、おっかない。

「ちくしょう！」

リンチを受けていた子にトドメを差すつもりだろうか？ 猿男は足を振り上げる。

「危ない！」

明久がそう叫ぶと同時に僕は全速力で走り出す、間一髪、男の子に蹴りが入る前に猿男を押し倒した。

「このガキ！」

「いい加減にしないと本当に警察呼ぶよ」

倒れている猿男を見下しながら言ってる、流石の猿頭も自分が不利だって事が分かったらしい、舌打ちしてから仲間を追いかけた。

「真琴、大丈夫？」

明久が心配そうに僕を見る。

「うん、僕は平気、それよりこの子を運ばなきゃ、明久とりあえずさっきの公園につれてくよ」

「分かった、じゃ真琴は足を持って、僕は頭を持つから」

明久と協力して男の子を抱え上げる。

人攫いに間違えられないかと冷や冷やしながら公園まで運びベンチに寝かせた、落ち着いて怪我の具合をみると大した事はなさそうで一安心。

「良かったね明久、助けられてさ」

「うん……って真琴、何いじってるの？」

明久が僕の手元を見る、手の中には僕のじゃない誰かさんの財布があった。

「ああ、これはさっきこの子を蹴ろうとした男からスッ……男が落とした財布だよ」

「ねえ、今スツタって言わなかった？」

言ってません。

「何か手がかりになるようなものは無いかなって、でも見てよ、このレシートの数。財布位整理しろよっ感じ」

「誤魔化したな、スツタンでしょ」

「拾ったんだよ」

僕と明久が問答している内に男の子が目を覚ました、焦点の定まらない瞳で空を見上げてる。

「大丈夫!？」

明久が声をかけると不安げな様子で僕達を見上げてきた。

「あ、えーっと……君は倒れてたんだよ、僕は吉井 明久、君は？」

安心させるような笑みを浮かべながら話しかける明久、男の子もおずおずと口を開いた。

「伊沢……トシキ……です」

当たり前だけど僕達を信用なんかしていないようだ、でも終始不安げな様子に僕も不安な気分が伝染していた。思えばこれはこれから起こる厄介事を予感していたのかもしれない。

## I W G P 編プロローグ そうだ池袋行こう（後書き）

「お久しぶりです、沢渡 真琴です、まずはお読み下さったお礼を申し上げます

「今回は作者的に非常に難産だったようです、まあ慣れない事するからですけど」

「次回から本格的に話に入るそうですが果たして何時になることやら……まあ、余りに遅れそうな時は鞭打ってでも書かせますからご安心を」

「お読み下さった皆さん、ありがとうございました！」

感想、評価お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8250j/>

---

バカとテストと転生者

2011年8月31日06時46分発行